HQ
1104
J74

Dec. 1899
no. 501

明治三十二年十二月十日

女學雜誌

第五百一號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第五百壹號目次

◎社說
又一年
結婚の理想墮落せんとす

◎亞米利加だより
異國の秋(櫻井鷗村)
北米紀行
蠻歌聲あり
魚腹藻屑
桑港の婦人

◎家庭
家庭の風波、唯一の[illegible]
友白髮の感謝
迷ひ道(左琴女)

◎大磯だより
十一月廿四日(中島湘煙)

◎講義
女義太夫の說(青柳有美)

◎雜錄
冬の觀(山形東根)
琴の音(天行)
罰な熱海のさまよひ日記(有美)
西都もみぢ寺(露草)

◎評論
教育宗教隔離の訓令

◎寄書
見ぬわかれ(月野美代子)

◎隨感
清獨併せ存らふ○慨然として仕ず○獨舞臺○
尙ほ血涙ありや◎泣き笑ふの苦節

◎時報
○娼妓營業廢止起訴及勝訴の事○ピアソン夫人長逝○姬百合と日本婦人○最近の演奏會

社告

◎本誌は每月二回即はち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◎十日發行の分は稍や平易實際の記事を專にし、第一、家庭の整理改善に益あるべき事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學宗教及び教育等に對する吾黨の卑見を陳述し、大に世上君子に問はんとするを旨とす。

◎單に十日發行の分のみ又は廿五日發行の分のみと指定して所望せらるゝものあらば其の需めに應ずべし

●女學雜誌定價表●

前金	廣告料	送金
壹冊定價 拾錢 半年分定價 壹圓拾錢 一年分定價 貳圓(內國無郵稅) 代金は總じて前金にて御注文ありたし◎年來引續購讀の諸君にて前金切れ候共御斷無之間は引續き發送することも可有之事◎但し其節は總て一冊十錢の割にて計算し追て請求可致事是れ甚だ不本意乍ら計算の煩はしき不得止左樣仕候間かねて御承知置被下度候	一行(廿二字詰)一回 前金拾錢 同 三回以上 一割引 同 六回以上 二割引	送金は東京駒込郵便支局に宛て小爲替にせられたし◎郵便切手にて送らるゝ人は總べて一割增にて計算せられたし

明治三十二年十二月十日印刷
明治三十二年十二月十日發行
發行兼編輯人 巖本善治
印刷人 布川孫市
東京府北豐島郡巢鴨村字庚申塚二百四十六番地
發行所 女學雜誌社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 株式會社秀英舍第一工場
(電話番町十九番)

◎婦人科
◉小兒科專門

至誠醫院治療之趣旨

本邦婦女の特性として溫柔靜肅を旨とし閨門深く垂れ籠めて猥りに人に接はらぬを貞家の庭訓となすが故に男子とは席を同ふし言を交すをさへ道に缺くるものとし語るべき病症殊に子宮疾患の如きは醫に就くを羞ぢ厭ふが爲めに唯密かに心を痛め身を苦しめ終には人生の快樂を殺ぎ子孫の繁榮を遮ぎり天壽を夭折するもの尠なからず豈嘆かはしき至ならずや 本院長も又是國風の間に人となり深く此弊を憂へ之を救ふの道もがなと慨然婦女の分として妄りに身を挺んで尊榮にして深邃なる醫學に志し研瑳多年その業を卒へ爾來又た數年東西の諸大家に就きて特に婦人科を研究して刀圭に從事する所以のものは己れ女性に生れたるの天職たるを信じて泥み近づき易く打ち解け語らひ易き同胞姉妹の疾患に對しては能く貞淑の美德を傷けず愼重懇切に治療し得るは竊かに諸大家に讓らざるの特技あるを期す又小兒科にありては第一の慈母として狎れ懷き易きが故に幼兒をして畏ぢ慄れ失聲啼泣せしむるが如きことなく安靜に診療を施し得るを以て誤診姑息等の弊なしとす是れ本院長が起ちて世の同胞に告ぐる所以なり

院長女醫鷲山强生診察(本院午前 分院午後)

本院麴町區飯田町四丁目九番地
分院京橋區宗十郎町一番地
至誠醫院

女學雜誌

第五百一號

明治三十二年
十二月十日發兌

社説

又一年

十二月と云ふ月に入れば、日は俄かに短かくなれり。人の歩みも忙がしく、事の處置も早急なれど、尚ほ以て心せかるゝ思ひして、光陰の足らざるを感ず。

顧りみて過去を看れば、又一年飛び去りたり。其の去りしとの迅速なる、今にして之を思ふほど切なるは、曾て有らず。日も短かし、年も亦た短かし、人の一生も亦た斯く短かきもの乎。

又一年と過ぐし、又々一年と過ぐし、年々速やかに過ぎて、遺す所ろ何ものぞ。白髪か、老朽か、悔恨か、死か。首途に於ける希望は何事にてありし、而して最後に穫べき取實は果して何ものなる乎。

年々歳々の花、實を遺す。歳々年々の人、何の結果ぞ。日東より出でて西に沒し、月、前半に照らして後半に隱る、規律嚴肅、役々として辭せず、三百有六十五日、一日も休めず。而して、人の勞役は如何ん。

枯葉、地に敷きて獨木悄然たり。鴻雁、高く鳴いて、霜露、荻に落つ。寒月の凄慘たるに物思ひして、夜の長きに惆悵する時、人間の多恨、今を以て最となす。

嗚呼、一年短かきにあらず、試ろむべく學ぶべき機會は多くありし。吾今ま茫然として獲たる所なきが如き、即はち其の不可なる所以を學得したり。經綸の淺小なる、識字の狹隘なる、赤誠の熱到せざる、氣力の旺盛ならざる、吾深く覺り得たり。然らば即はち、此の覺は悔にあらずして希望なり、絕望にあらずして立志なり。新意を以て新年を迎ふる時、當年の一代は、之が犧牲として聖なる用を爲せしと知る。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

結婚の理想墮落せんとす

女學、新日本に入りて稍や進歩せしが如し。而も、新日本に於て墮落せしものは、結婚の理想なり。男子、女を娶るの理想に於て。女子、男子に嫁ぐの理想に於て。兩つながら墮落したり。吾人は尤とも多く男子に對して責むる所あらんとすれど、女子の過まちも亦少なからず。

夫れ、閨閥に委賴する男子の卑屈はまた論ずるにも足らず。左れど、其心眞とに委賴すとせば、其の卑屈なる中にも尙ほ一點の誠意はあり。寧ろ其の弱點を憫れみて、暫らく其の無氣力を恕すべきのみ。然るに、當今多數の男子が爲す普通の流行を見るに、其閨閥に委賴するは只だ錢に委賴するのみ、初めより其女性を眼中に置かざる也。否な、眼中に置くとあらば、只だ之を器具として方便に使用し、以て一時の翫弄に供せんとするのみ。此の故に、其用了りて我慾達したる後、もしくは我位地安固して亦た顧慮するに足らざる程とならば、則はち擯斥絕緣して意に介せざること、宛がら弊履を棄つるが如し。其の無情、其の冷酷、其の無禮、其の不德、人道總べて許さず、何んぞ伉儷の溫かきを以て論ずべきものならんや。嗚呼、今の學者、今の紳士、今の大丈夫、何んするものぞ。可憐の婦女子を毒して以て漸やく其の地步を立つ、其面に唾するだに尙ほ君子の恥づる所なり。假令ひ、女學開けず、女權伸びざりし時と云ふと雖ども、昔時の日本帝國に於ては、斯如き男子をして橫行せしむることなかりき。今の新日本は果して女子の友なる乎。

然りと雖ども、女子も亦た誤まれり。其の結婚の理想墮落したり。古の女子は、幸福の爲に嫁ぐはなかりき、而して今は幸福の爲にするを善きことと思へり。結婚は一の義なり、情慾の爲めに放逸するものにあらず、結婚は一の事業なり、安樂の爲めに貪ぼるべきものにあらず。所謂ゆるハッピー、ホーム(多樂なる室家)は其の結果に就て言ふ、其の理想に於て言ふべからず。人先づ幸福を求めて而して幸福を得べけんや、幸福は只だ與へらるべき報酬なるのみ。今の文明流の女子反つて此の本末を誤まり、初めより其幸福を求むるの爲に擇ばんとす、誤まりも亦た太甚しからずや。我の幸福を求むる如く、彼も亦た之を要め、兩々互ひに樂みを征して則はち衝突

破裂す。今の新室家の外觀に美にして內實に醜なる所以の大原因、凡そ此邊に淵源せざるはなし。これ豈に新日本女子結婚理想の墮落にあらずや。

嗚呼、甚はだしい哉、婚姻道の衰ろへたると。新日本は、舊日本に誇るに足らず。女學の進步とは何の謂ひぞ。女學校の多きとか、女學雜誌の多きと乎。

夫れ、單に進步を以て高尙の事となす勿れ。進步して溝壑に落るとあり、停步して地を固むるとあり。今只だ忙々として、外形外觀の發達に苦慮し、理想、主義の大道に於て發揮せしむる所ろなくば、進步は即はち退步にあらずや。

道一つ、古今に通じて誤まるとなく、中外に施こして戾る所なけん。能く其の一貫する所を失なわずして、而も機に際するの變化改善を促がす。喩えば一身常に存し、衣服四時に變り、衣服四時に新たらしくして、身躰彌よ健亙なるが如し。能く此の方針を達觀して、誤まりなき改進を主唱するものなかつせば、凡そ新事物の發展に於て、反つて公私の害を爲さゝるものは尠なし。主唱に道を得ざる可らざる此の故也。新日本の新女學に於て、殊に深く此の要義を感ず。

亞米利加だより

異國の秋

櫻井鷗村(寄)

過る日舊學友を尋ねて、紐育に來りし序、領事館に行きしに、思ひ掛けなくも、女學雜誌數部の本國より到來せるを得て、學友と之を繙きて昨今の感いと深かり、如雲師兄はじめ東根、紫菀、有美さては露草君等の、いつに變りなき、まめやかる筆の痕を見て、故鄉の便得たる心地に、いとなつかしくはんべり。

今日また貴府の田舍に歸りて、彼處にこの用向濟まさんとするに、近く本國への便船あるべしとの事故、取急ぎ、兼て認めたる『北米紀行』の桑港のあらましの通信送りなんとするに、添へて、また一筆なん加へて、異國の秋の風は我身にかくと告げなん。

五月雨のいたく降る頃、本國を立ち出でゝ、桑港に來りてよりは春か秋か、わいだめなき空に二た月を過し、霧分け

衣、露しげき朝夕は多かりつれど、袖ぬらす雨の日を見ず。シカゴに來りて、秋雨の今日もまた明日もと降り暮らしたる、されど、大都の景色、秋の思を添へず。折柄中秋の頃と覺しく、雨無き夜には月空に懸かりて、渺茫たるミシガンの湖面に、姿を粧ふもの丶如かりつれど、此地に多き、製造處の煤煙、空を籠めて影、朧なるは浮雲はた霞の趣深きに似もやらずして、いとそこなひたり。

貴府に近きマルヴァレの片里に來りし折は、また紅葉の梢いと綠深かりしも、二三日過ぎてのさる夜の大霜に、一時に色黃ばみ渡りて、今は早や落葉の褥、大地に敷きぬ。異國のことなる空の果までも、變らぬものは秋の風よと、遠遊の孤客情を動かす頃、或夜霧いと深く、月暗く、木葉の時雨、窓に聲あるに、ゆくりなくも得たる故鄕よりの津田梅子の便よむに、松本荻江女史の身まかりたまいし事見ゆ。驚かれぬる事此上もなく、過る六月の八日我を横濱の埠頭、雨しげき中に送りたまひし事の、思ひきやつゐの別れとなりたらんとは。かなしさに添へて、女史の生前、折々我の腰折など批判したまひし事ありしを思ひ出でつ、あるか無きかの詩心をさぐりて、手向草かき散しぬ。十月十五日の夜深の筆なり。

しばしとてちぎりしものを
あへなくもつゐの別となりし君かな。

われまつと思ひし人のいまははや
無き數とこそ聞くぞかなしき。

秋のあはれ更に深く、

こと國のことなる空も秋の夜は
月に時雨にものぞかなしき

月は暗く木の葉は霧にしぐれけり
故鄕のたよりえたる此夜に

なにとなくものかなしきは此ころの
木葉しぐる丶アメリカの空

とつ國の秋の夕のさびしさは
我身ひとつの心地こそすれ

ふる里をいかにしのへとこと國の
夕べしぐれて木の葉ふるらん

十月十九日の夜、月いと明かなり。故鄕には後の月の頃なりけん。夕べの食事はて丶、新渡戸氏一家の人々、鈴木歌子の

の許へ手紙書く。博士も夫人も、つき人も、はた子息は、此頃學びたる英字覺束なげに書く。我にも言添へよとあるに

ふるさとに入るをしみけん月かげは
いまあめりかの空にこそすめ

幾千里はるかにへだつこと國の
空にもすめる秋の夜の月

こと國の秋はやうやく更けにけり
落葉にさゆる後の夜の月

など、八十路あまりの老婆の腰にも似たらんを讀みてしるす。故郷を離れてより此方、目に觸れ、耳に聞きたる事、いまだ多からねども、もし如雲兄ならば、百千々の隨感、情いと濃かなるべし。紫菀兄ならば歌まん、東根兄ならば、統計や作くらん、有美兄ならば惡魔の子の咆哮やあらん。われ如き情無きものは、空しく日を消して、人に告ぐべき事も尠し。されど、役目おそろしければ、折あるにまかせて、音づれすべし。あはれ、なつかしの友よ、我友よ、こと問はん故郷の秋の風いかに。（十月廿七日朝）

（八三三）

北米紀行（第一回）

櫻井鷗村（於費府近郊寓）

顧れば六月上旬に、吾の暫く別を讀者に告げて、渡米の途に上りし以來、今日は早や既に百二十餘日を閲みしたる後となり、歲月流るゝが如きを、いや更に感じつゝ、思へば、此間一報の以て讀者に寄する者なかりしは、吾ながら、我の疎懶なるに驚かるゝぞかし。さりながら、日は既に多くを算へたれども見聞せし事はいと少く、横濱を發してよりサン、フランシスコに上陸するまでに、三十餘日を費したる、珍らしき旅行をなし、それより日本人には最早少しも珍らしからぬ桑港の市街に二ヶ月を送りて、後シカゴに到りしも都合ありて直ちに之を辭して、今やフィラデルフィヤ府より二十哩を隔る田舍のマルヴァン村に、農學博士新渡戸稻造君一家族の病を養つて滯在せるに寄りて、見聞これより多からんとを期しつゝあり。凡そ、吾がこれまでの旅行中の些少の見聞は、米國見聞記として記するは、いと少き價値を有す。何となれば、米國の粹は東部諸州殊に新英州諸州の中に在り。吾が視察の目的たる女子教育事業の如きも、此地方に於て最

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

も盛んにして、西部地方には、殆どこれといふ女子大學も無し。カリフォルニア州のスタンフォルド大學校長博士ジョルダン氏は、米國には、アレガニー山脈以西（即ち米國の中部西部を含む）には女子大學なる者なしと云ひたるが、事實は、桑港近郊に僅に一のミルス女子大學を有するなれども、この校とても、微々たるものにして、到底東部の諸女子大學に比ぶべきものに非ず。勿論米國は男女混合教育の國とて、下は小學校より中學を經て大學に至るまで、男女席を交へて教育を受けつゝありて、中部、西部地方なりとて、各州の諸公立大學其他私立の大學には、いづれも驚くべき程多數の女生徒を有す。女子教育の普及せると大に羨望に堪へたる次第なり。さりながら其中にも東部諸州は、米國教育の中心なれば、此處に於て、始めて、予の大目的たる見聞をなして、讀者の聞かんと欲する處に告ぐる事あるを得べしと信ず。たゞ今回は久濶の責を塞がんが爲に、シカゴ以西の見聞につきて、往事を繰返しつゝ、あはれ數千里の外、異國の空、秋風身にしみて、大和の國の殊にしぬばれつ、此里に繁り茂れる楓葉の霜にいたみて黄ばめる見れば、旅の空、何か安き心あらんや。たゞおのれ慰むばかりにぞ、かすかなる燈の影に筆とりて、言を故郷の人に寄するにこそ。

●蠻歌月に聲あり

橫濱の埠頭に我國土山川に辭してより爾來十日、また陸影を見ず、見ゆる限りは水と空と、はてなき大海原の波越えて、先は穩なる方の航海をなしつ、布哇ホノル、の港に着きしには、六月十七日拂曉の事なりき。陸地にあくがれし末に、また兼てより太平海中の樂園と聞く此島なれば、我先に上陸して胸襟を一新せんものと思ひしに、思ひ掛けきや、先きの十日の中某の日に下等室に在りて死亡せし一人の支那人は、忌まはしき黑死病の疑を受けて、爲に港醫禁令して、船を港内に入れしめず、また乘客の陸に上る事を許さず。我等の失望は云はん方なかりしが、此儘此處の命令に八日間を停泊すべきに非ずとして、船長等、炭水食料を收めて三日目の午後、纜を解きたり。其出帆の前夜、月はいと明に檣頭にかゝりて影万里の波に漂ひ、此時我と共に望郷の人たらざるもの夫れ誰とかなすとの感慨いと切なるまゝに夜更けて、

ケビン、人静かならんとして忽ち何處よりとも始の程は知ず、唱歌劉喨の聲、波に響きて湧くが來れり。床を蹴つて、船端に出づれば、こは本船さして來りつゝある石炭舟の人足にて、今日の晝間にも見たるあやしげなる様せる夥多の蠻人が、月に聞けとてか、波よ聲を和せよとてか、姿にも似ぬいと美しくまた朗かなる聲して、國風を歌ふなりけり。誰彼歌を合せつゝ、手を拍つあれば、船端を叩くあり、またバンチヤウらしき樂器を奏するもあり、亡國の音にやと耳を澄ませば、さにはあらず、其聲諧々として樂めるものゝ如し。國は破れて山河依然たり、歌謠また樂しめりとせば、あゝこれ何の狀ぞ。英米の客、感懐すると如何なりしか知らず、眠より覺め來りて、蠻歌につれて、手足共に舞ふものは多かりき。窓より聲かけて我眠らんに、彼聲騒かし、止めてよと云ひし一婦人の心の賤しさはいふまでも無し。既にして蠻人等、船に達して、また歌はず。實にや折柄の景、心にしみて、感尠からず。白氏が琵琶行の悲痛なるに似ずと雖も、なほ征客の爲に情を動かさるゝ勿らんや。

●魚腹藻屑

行くものも、送るものも、迎るものも、共に事無かれかしと祈るは旅の空なるが、此度の航海こそ、乘客の多數に取りては、其初はいと平穏なる方なりしも、布哇着の前後よりして、日本丸と其乘客とは、不運なる航海をなすこととなれり。彼支那人の死骸を船中にて解剖し、其後は、機關室の石炭竈に投じて火に附したる、慘澹至極の出來事ありてより後數日、我等は、また我同胞の一婦人を海中に葬るの悲しきに逢へり。日本丸に乘じたる布哇出稼人總數二百四十餘名の中に一婦人其夫に伴へるありしが、船醉の爲に持病を發して、布哇に着するまでに、其容躰既に尋常ならず。然るに、ホノルヽの港醫は、他の上陸客の他船に轉乘して、消毒日數の過ぐるを待つを許したるに、この病人に對しては、無情にも之を許さゞりしかば、止むを得ず、其夫と共に桑港まで連れ行くことゝなしたるは、誰しも、こはたゞ彼女の死命を速かにせしむる事なるのみとは知りたりき。桑港着の二日前、其夕刻、我、甲板を逍遥せしに、艫の方、何となく騒がし、事の由を知らんとて、彼處にゆけば、水火夫皆な新しき服を着け、船長また其間に立つ、やゝありて彼等の前に齎らされしは、

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

白布にて包まれたる、哀れなる彼婦人の死體にてありき。扨ては彼女、遂に其不幸なる運命を遂げて、今や故國遙かに、大海原の藻屑と消え、魚腹の料たらんとするにやと、見る〳〵、船長の引導の短き一句、彼女を幾千尋の海底に投げ入れし跡には泡沫の少時見えて、忽ち消えしのみ。

桑港灣頭、また日本丸中の密航者二人、脱走を企てゝ、海中に溺死したるあり。かゝる不幸の出來事の重なり至りし結果、我等乘客は天使島撿疫所に十五日の間拘置せられ、辜無くして見る配處の月は、さまで好ましきものに非らざるを感じぬ。桑港上陸後、外人我に問ふに、天使島の日月如何を以てすれば、予は答へて彼は天使島ならずや。我はドレーユーとなりて、惡魔島に配せられざりしを幸とすと、折柄噂高きドレーユー事件に事よせて、意味無き譫語を吐しのみ。

●桑港の婦人

桑港に上陸したる時よりして、予は、洋行者の仲間入をしたる者と、云はゞ云ひ得らるゝものとなりたる如けれども、自身には、左迄の感も起らず。此地日本人の渡來せるもの三

千人に及び、道を行く、必ずや、數人の同胞を見、一日中英語を用ゐると無くして、何の不自由無く、日本料理も自由の儘なれば、殆ど自國に在の思ひをなす時もあり。桑港に在りては、英語の會話は中々に上達せず、數年間此に滯在して居ながら、外人と言語の通ぜぬものも甚だ多しとかや。餘事は暫く措く。而して予の桑港に來りて、最も珍らしと感じたるは、何ぞと、人問ば、階高き家屋よりも、珍らしきクーブルカァの阪路急なる街路を上下するよりも、靴を磨くイ太利人よりも、金満家の猶太人よりも、白暮街衢を徘徊する怪しき女よりも、罪惡の巣窟たる支那街よりも、廣大なる公園よりも、平素志の存する處に目の着く所以か、予は第一に、米國は實に女子の天下なりとの噂に違はぬ事を實見したる事なり。

女子の天下といふには、勿論女房天下の意義も籠れりと知るべし。亭主に、破れ帽子破れ衣服を着せて置いて自分には、四季の流行の佛國人造絹の衣裳を買ひ、流行の帽子(此節の流行は羅紗帽子に鳥の羽を一本斜に挿したる瀟泊なるものか、剝製の鳥を附したるものなり。)を購ふに忙がはしとぞ。女子

の勞働は衣服裝飾品の慾望に原因よりと多分なりとの評も、眞を得たる場合多かるべし。

米國は女子の國なりとは、たゞ嬶天下なるのみの謂には非ずして、先づ桑港に於て見るも、女子の職業の區域の甚だ廣きは、我等には目覺しき計りなり。商店の賣子は女子の方多く、殊に大商店に於て然り、會社官省のオフィスには必ず女子のタイプライターあり、電信、電話、宿屋の勘定方乃至學校敎員其他あらゆる方面に向つて、女子は職業を得たり。桂庵口入屋は女子を以て滿たされ、會社役處大商店などの仕舞時刻なる五時過頃に市街の人道市街鐵道の車、またオークランド行の通ひ船の中は通勤奉公の若き女子を以て滿たされたるを見る。

桑港のみに就ていふに、此地には、女子の數概して男子より尠きかの感あり。實際の統計を知らねば斷言なし得ざれども、凡そ市街を歩み、車に乗り、船に乗るものは、彼晩刻ならずとも、女子を見る事男子よりも多きかと思はるゝなり。夜中など車に乗りても相乘は大方婦人なり。

女子に職業の多き所以は、其職業の假令ばタイプライター敎員の如くに、最もよく女子に適したる者及需要多きにも由るべけれ共、また最大原因は賃金の男子に比して低廉なるとなり。店の賣子の如きは、日本なれば、女の賣子は愛嬌が良くて宜しき便利あれども、此國の女賣子は實に不愛想至極也。女敎員の數は甚だ多く、桑港にてハイスクール以下の諸學校(幼稚園を含有せず)の敎員總數一昨年の統計によるに九百七十四人の中男敎員の八十七人に對する女敎員の八百八十七人の多きあり其給料は小學校女敎員に平均一ヶ月七十九弗〇五仙、ハイスクールにて百十三弗五十仙なり。

なほ又他に多少敎育ある婦人は私塾を開きて、多くて二三十人位の生徒を集めて初等普通の敎育を施せり。かゝる私塾に通學するものは、多くは富家の子女にして、凡て公立學校は無月謝なれば貧民の子女も自由に通學するが故に、富家の父母は己の子女の彼等と伍するを厭いて、一ヶ月十弗內外の月謝を拂つて、彼種の私塾に通學せしむる習なるが故に私塾敎師は中々に良き職業を得て多くの金を儲くるなり。

敎育に乏しき女子の職業は、賣子、其次は下女なり。下女として當地に評判の宜しきは瑞典婦人なりとか。勞働と個人

とは全く別物にして考ふる國柄なるとは、下女によりて、最も具く知らる。下女と雖も、約束通の勞働の外は主人と何の關する處無く、主人とする者、我か氣に入らねば、サッサと出で行くなり。友人の下宿せし或家にて、某の朝、珍らしく主婦階段を掃除せるを見て、如何してと問へば、下女が、昨日午後立派な帽子を被つて何處へか出て行つた切、未だに歸らぬ故と答へたるが、其後其下女は遂に歸り來らざりし。しかしこは少しも珍らしからぬ事にて、下女と主人との關係は、かく淺ましきなり。

米國は世界中諸人種の集合躰よりなる國にして、殊に桑港の如き新開地に於て、其甚だしきを見る。世界中の大慾人間が一攫千金の利を企圖して集り來りて、此一市街を成せるが故、人氣の從つて宜しき筈は無く、東部の純粹なる米國人より度外視せらるゝは無理からぬ事なり。世界中の殆ど凡ての人種を一時に陳列して見んと思ふ地理學者などは、米國殊に桑港に來るを可とす。街路一間四方の間を歩むもの、悉く同人種に非ず、少くとも二三人種よりすと云ふも不可なり。曾て夜、友人と共に人通少き街を散歩せしに、後より來る二人の婦人は獨逸語を操り、前に行くものは支那人なり、傍を過ぎ去るものは黒人なり、中間には日本語を語る我等ありき。されどかゝる事は偶然の事に非ずして、其際たゞ、殊に予等の心を惹きて、今なほ記憶に存するなるのみ。かゝる故に桑港の婦人と概稱するものも、亦其中には少くとも二十ヶ國餘別の人種を含むものと知るべし。

カリフォルニヤ州の三名物は、花に、果物に女子なりとの事なるが、其中最も劣等なるは女子なるべしと。所謂カリフォルニア、ガールと稱せらるゝものは、年中春の如き氣候の故にて年若きは膚色頗る美しけれども（氣候のまた乾燥に過ぎたるを以て年老ひては、早く皺を生ず）如何にも派手好みにて、衣服といひ、帽子といひ、髪容といひ、甚だケバ〳〵し。某博士、予に語りて、東部の婦人は、桑港の者程に、派手好みをせずと云ひしが、チカゴ以來に於て今日まで見る處にては、其言の如きを知る。桑港の女子の裝飾に過ぎたるは、田舍女の厚化粧といふ風なるべし、又何の國にても新開繁昌の地の風俗は、華美に過ぎて、雅致高尙ならざる事實に此地も亦た洩れぬなるべし。

家庭の風波、唯一の舵

一個の人間に二種の氣質あり、古人之を述懐して、二人の人吾が胸中に鬪かふと言へり。其の一つは天より出でて天の使に似、他の一つは地より出でて悪魔に似たり。同じ一人に二様の性あるは不審なれど、此の類の不審は森羅萬象に充ち満ちたり。水に清水あり濁水ありて同もに一河に混淆す、木に花あり刺ありて等しく枝頭に並列せり。左れば、一面より人を見れば人に鬼はなく、他面より更に見れば人は皆な泥棒の如し。或る時は心切慈悲にして痛める葦を扱かふ如く、他の時は剛情我慾にして頑たる巨石の動かず感じなきに左も似たり。此の故に、人は絶待に信じがたきと同もに、亦た無下に見棄てがたし。敎育とは、其の善き方を引伸べて悪しき方を防ぐなり。宗敎とは、其の悪しき方を濟度して、善き方に力を與ふるなり。警察とは、其の悪しき方の我儘になるを抑ゆるなり。人の相交わるは、此の悪しき方に怨して、善き方に信ぜざる可らず。就中、家庭に於て一族血縁の相接する、須からく吾が善性を盡して他の善性に訴たへ、以て其の一門を天使の隣に移すべし。

天地漠々、世界茫々、人多く家澤なり。此の間だに居て特に血縁を結び、一戸に住ふ。天命不可思議、人事尤とも奇妙、苟且にも忽諸に見做すべきことにあらず。左れど、相頼よる可き一門が反つて爭そひの入口となり、同胞骨肉、屢ば感情を害して、寧ろ他人に劣る交際となること毎度あり。甚はだしきは、親戚あるを以て煩らひとなし、同胞骨肉あるを以て不運とかこつ族なきにあらず。人事の顛倒、亦た酷ならずや。凡そ戸外には暴風暴雨ありとも、最と靜けく戸内に樂しみ合ふが家庭の賜物なり。左るに、戸内にすら雨漏り風起らんには、苦しきこと中々に戸外に於ける比ひならず。世に於て、濕れもし塗れもするは兼てよりの覺悟ながら、家庭に於て又亦其の痛苦に會わんは、人の殆んど耐えがたき所なり。

然るに、千門万戸、福の來りて内に住まふ所は稀有の事なり。外より眺めて浦山しく見ゆる家庭にも、内實は意外の珍事あ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

り。美人に臟腑ある如く、麗はしきものゝ中に種々の入組あり。よし天下に泰平の折はありとも、家庭に一波擧らざる大和の續かんとは少なし。世上、此の文を讀んで反駁し得る人は多くあらじ、密かに點頭して、左なり〳〵とつぶやき玉はん人の多くあることこそ痛ましけれ。

此の故に告ぐ、世間十方の善男善女。もし斯らん時に際したらば、其身を如何にか處置し玉ふ。家政學の書幾冊を讀破したる、何等の助けぞ。口に孔孟を說き、耳に釋尊救主の御敎を聞く、如何なる助けぞ。古人此の際、如何にかせし、其の傳記、史冊に存す。般鑑歷々、訓示明白。其道の疑がはしきにあらず、斷然足を揚ぐるとの難きなり。もし一大決心を起し、奮然として身を挺するとなくば、一百の說法、一千の古訓、それはた何の助けかする。

他なし、此際に於ける人の決心は只だ一なり。曰く、身を獻じて善を爲す、これのみ。よし如何に家庭の亂は複雜し、人の心は疑惑し、千糸入り亂れ、万緒もつれ合ふとも、もしただ一人、眞にたゞ一人、奮然其間だに至誠善美を悉くさんとする決死の發心をだに爲すものあらば、唯だ此の一人の一心の爲めに、總べての疑題氷釋し、紛亂自から解けんとす。一日にして効なくとも疑ふ勿れ、一年にして驗なくとも疑ふ勿れ、十年にして結果なくとも疑ふ勿れ、全然一生を投與して而して倘ほ効驗なくとも決して疑ふ勿れ。何んとなれば、此の一道に優りたる方法の決して他に存するなきことを知れば也。

之を人心の感激と云ひ、之を人の善性の照應と言ふ。如何なる惡人なりとも善性はあり。まして、家庭一門の同族をや。其の餘りに近しきが故に、其の餘りに入り組しが故に、種々の誤解、種々の疑惑を重ねて、更に種々の不平を釀生し來れり。而して、此等紛雜の防害を透して、短刀の直入する如く、電氣の一閃する如く、直ちに人の胸奧より人の胸奧に徹底するものは、只だ善心の感激なり。我もし我が至誠を盡し、我が善心を悉くして、死を決して善を爲すの覺悟だにあらば、此の火自から万物を燒き、此火自から万夜を照らさん。吁、唯だ此の一道の外、他に何の奇策妙案あらんや。

左れば、家庭亂に際して、心志痛苦するの人は、敢て其の救濟策を、他に相談すべき必要もなし。いかに其の策ありとも、

策や果た何の甲斐あらんや。決して人に計るなかれ、人に計るは尙ほ人に待つある也。此の際、何ものを人に待つべき。只だ但だ吾が本心を發揮して、吾が胸底の善性を傾盡するあるのみ。

固より是れ容易の事にあらず。然れども、人間の一生は何程と計算し、又た一生を生くるとの價値、何事ぞと反省すべし。奢り樂しむとも、何等の力ぞ。逸居放浪すとも、何等の悅こびぞ。吾本心の叫びは、善を爲したる時の外、十分の滿足なし。人に情けをつくし、愛を寄せし時の外、ねざめ悪しゝ。同じき一生、同じき事業を爲して、同じき塵界に歸すべき吾身なれば、出來べき限り、善を盡し、心切を盡し、人の爲に盡して、扨て平らかに此の床に安眠せんと欲するこそ、吾心最後の要求ならずや。

肅んで語を吾同人社友に寄す。諸君の中、今ま家庭の風波にもまれつゝある人多し。其の冲々たる苦心、其の言ひ述べがたき悲痛、妙に吾人の心を刺す。吾人幾度びか之を想ひ之を念じて、半夜、枕を濕ほして眠らず。人生何ものぞ、家庭何ものぞ、夫婦昆弟の結合何ものぞと疑惑する途端、忽然、天命の秘機に念じ至りて、醒然として覺る。嗚呼、諸君の涙は諸君ひとりの涙にあらず、世に之を分つもの多し。諸君の地位にあるものは、たゞ諸君のみにはあらず。又思へ、諸君は砂漠無人の境に於て、たゞ諸君のみ徒らに其の痛悶に伏するにあらず。皇天、慈愛の父、しろしめしつゝあり。天下、同情の友幾人もあり。左れば告ぐ、諸君決して失心せず、落膽せず、怨望せず、反つて奮然として其の善美の心を奮ひ起し、只だ其の一つを生命として、復活して靈働せよ。必らずや必らずや久しからずして、天の祝福下らん。

友白髪の感謝

無病息災を禱る人は多くあれども、無病息災のお禮を言ふ人は少なし。人間の幸福中、身躰の丈夫なるほど幸福なるは稀なれども、身、實際丈夫にして病氣の煩らひなき間は、頓と其の有難味を覺ることなし。左れど、一朝、いさゝかの病にかゝりても、無病と云ふとの如何に幸福なるかに忽ち思ひ到る。多病の人にあつては尙更の事なり。

爪を澤山さうに思ひ、伸びれば伸びれば切つて棄て、何の事にも思はざる人々の、小指一本の爪が極々僅かに割れても、剥げても、大層に感ずるものなり。初めてその爪と云ふものが氣にかゝりて、平生何程の用を爲せしかの事實忽ち明るくなり、只だ此の一小部分の怪我の爲めに、數日思ふ丈の仕事の出來ざるものあるべし。

健康なるときは、身躰を忘れ、身躰の健康と云ふとの如何に忝けなきかを覺らず。万事皆な斯の如し。一家の人皆な健康にて、兩親あり、妻子あり、兄弟あり。何れも丈夫にて恙がなく、そろひ居る間は、眞に其の有がたみを覺らず。些細の事にも不平不滿を言ふとなれど、扨ても其の一人だに先だちたる經驗に遭遇すれば、在ませし内の如何に樂しくて、亡き今日の何程悲しきやの事實を初めて承知すべし。

樹靜かならんと欲すれば風休まず、子養なはんと欲すれば、親在まさず。親を失なひし後の苦しさは、親ある人の覺りがたき所ろなり。立身出世など云ふとの益にも立たぬとを知れる身にも、親の悦こび玉ふ情を知りて勵みしこともありしものを、今は甲斐なきとに思ふべし。家を構えても、部屋を飾りても、余暇と云ふものを作りて御一處に遊びし様のとしても、今は誰か悦こび玉はん。人に賞められて恥かしき心地する内にも、親にのみは悦こばせまつりしが、今は誰に告げん。事業の成就、地位の高まり、友人の増加等、誰に悦こばせまつらん。凡そ、尤とも祝すべきとのありし時に、尤とも悲しくなるは、親に分れし子供の哀情なり。

兄弟姉妹に分れしもの。就中、男の兄弟が男の兄弟に賴よりし情、其の女の同胞に親しみし情、もしくは、女姓互ひに相親しみ、又女姓が其の男の兄弟に賴よりし情など、如何なる小說家といへども、能く盡すとは難しと思ふ。たとひ疎遠の同胞にても、事あるときの信任は當代第一なり。弟を失なつて樂しみ失せ、妹を失なつて樂しみ失せ、兄姉を失なつて世間俄かにさびしくなりし感情する人の心など、一々盡すべくあらず。

殊に、尤とも久しく家庭を一つにすべき、妻、夫、子などに別れし人の苦しさは、いふ斗りなし。中にも、夫婦こそ、偕老同穴とも稱し、一生同伴して終身歩みを同じにすべきものなるに、兩々相揃ひて長年なが生するものは太はだ稀なり。

夫婦互ひに壯健なる間は、世上の夫婦に片割れと云ふとの多き事實に頓と氣着かざるものなれど、一と度び氣を着けて眺むれば、伉儷揃つて十年二十年と同棲する家の極めて極めて少なきとを覺るもの也。夫を失なひて獨り暮らす寡婦は申す迄もなく、再嫁せし婦人の多きは即はち夫に分れしもの丶多きなり。又、二度目、三度目、甚しきは四度目の妻を迎へしものも世に多くあり、是れ大抵は其妻に分れしなり。斯くして二十五年の銀婚式を擧げ得るほどの夫婦は、世に於て至つて少なし。西洋人が、銅、鐵、銀、金などの名をつけて、結婚后の長壽を祝するは、實に實に情愛を盡したるの趣搆と云ふべし。

夫婦と云ふものは、變はらざるこそ善けれ。たとひ如何なる好緣に會すとも、先夫先妻を失なひし人の心は、何んとして其の記臆を消すべきや。羨やむ可し、三十四十はた五十の年月を同に過し、男女互ひに老ひ、白髮淸心あり、老軀雅情濃やかにして、茶を喫し、花を摘みて、昔しがたりするとの出來なんには。人それ此の幸福を想像せず、痴心に驅られ、若氣に激して、容易く盆水を覆へし、鏡を破つて早く新裝の人を戀ひんとす。無情なるのみにあらず、愚の至りなり。

又、其子に取りては、たとひ年中病の床に埋もれつゝありとも、生みの母、生みの父、世に在まさんに若くとなし。何等の善人なりとも、繼父、繼母の手にかゝるべき子等よ、汝は不幸なる哉。

左れば、夫婦は、互ひに其の健やかなるを祝せよ。貧苦、不自由などは、物の數ならず。もし丈夫にして伉儷同もに存せば、百の幸福は占領せられたるなり。健康の人が自から其の健康の有がたきを覺らざると等しく、夫婦恙がなく世に立つ人の其の忝けなさを覺らざるこそ、勿躰なきとなれ。本年も無病にて送られたり、これ何事にも優りたる幸福ぞと感謝し、閨中莞爾として祝杯を擧げ、いよ〳〵其身を大切にして夫婦末永く暮らし玉へや。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

迷ひ道

左琴女

呼貞ならんと欲すれば孝ならず孝ならんと欲すれば貞ならずと言へば。何か袈裟御前の如き一大事出來なしつる樣に聞ゆれど。決して〳〵さる六ヶ敷事にてはなく唯一時我心にとつおいつ定めかねたる。誠にさゝやかなる事柄ありしなり。

先つ頃止がたき用向ありて四五日ばかり浪花へ參りたりしが用向果てゝ歸途に着きてより汽車中にてふと生家の母の事思ひ出しぬ。諸事に紛れて久敷無沙汰に打過る事なれど追々積る年波に無かし此頃の夜長は寐覺勝なるとにて在さん。寐覺の果は何をか思ひ浮べ給ふべき。子とては家にある兄と離れたる我ばかりなれば何時も〳〵慈心は此兩人の上に掛るなりけり。

去れど兄の方は同じ家庭に起臥なせば。事ある折節ならずば流石に御胸は安かるべし。我は女の。しかも本性足はぬ勝なれば幼きより覆育の恩高大無量なるに況して。一旦外家へ出し給ひてよりは。若し先方なる家風に合ざる事はなきか。溫容を忘れて親類縁者に憎まれはせずや。又飜ては慣れぬ家庭に辛苦の此身を氣遣ひ給ひ。恙はせぬかと神に佛に。合藥とて送り給はる。名も。實母散。懷かしと思ひまゐらす事は十年の昔も今日の心も更に變りはなけれども。我年のふけ行まに〳〵厚き慈心の思ひしられて時に或は感謝の涙禁ずる能はず。去るに今この生家の近邊を行通ふ山陽鐵道に乘たる事とて。只管母をとはんの思になりぬ。然ど又一方を思へば。我家庭は目下誠に多事多端なるをりからにて。及ばぬながらも主婦の身の。一日の外出も無理なるにこゝ五日も外にありて亦かへるさに道よりなしては誠に家人に申譯なし。かつや良人は不斷ほかにありて繁忙極まる身の上なるに。我等の爲に數日の籠城。いかばかりの迷惑ならんか。想へば一時も早く歸宅なすこそ至當なれ。とは萬々承知なれど。願くは一度古郷に母を尋て。冬の夜長を一夜なりとも慰まほしく。さては此ふた道。何にせんかと思案なしつる間に汽車はいつしか姫路に着ぬ。直に歸宅すれば一先此處にて下車せねばならず。母をとはんには今少々西の方なり。然れど此まゝかへれば永く胸裡に母のと浮び出て。とても〳〵忘がたし。それよ此處

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

より婢女を先へ歸して其由家人に寄語なし。今一日の猶豫を乞はんと漸やく決心つきたれば。急ぎ婢女を下して我心初めて落つきぬ。此滊車は。京都より三田尻迄の急行なれば速力早くして瞬時に龍野驛に着きたれば、急ぎ下車して腕車に乘かへ生家の方へと走らせたり。

歸省の心の樂しさは。遠くは湖處子近くは花袋子などいふ男性詩人の能く書き盡されたることなるが。先入主とは誰しもなるか。我腦にも忘れ難きは。古郷に流るゝ某の川と。川に沿ひたる松原なりけり。幼少より結び慣し水耳なれし松風は相應じて堤を行く我を迎へらるゝ樣なるに。幼時遊びの數々思ひ出られて懷しさかぎりなきに。當面の方より手拭まぶかに被りて幼き兒の手を引ながら來るは誰かと打見るに。そのまへ母が久々召使ひたる婢女のふけたるなりけり。珍らしと思ふ間もなく彼れ我を見て。やゝ孃樣かと言ふ。孃樣孃さま。扨もをかしや孃樣時代は。旣幾歲の昔しなりしを。猶松原を四五丁行てくるりと廻れば。其處に生家はあるなり。車を下て門をいれば。甥ども兩人手に土つけて遊びゐたるが我を見るや否や。一大事出來の如き顏つきして家の内にかけこみつゝ姉母樣が〳〵がと家人に告ぐ。軈て人々立出て。能こそ〳〵と迎へくれられけるが。一夜を此家にて明し。翌日また昨日の驛に至りて。歸途に着きたるが。今日は何事も意にかゝるふしのあらねば。神機悠々として何となく樂しき樣なるに。今乘れる滊車の室には唯一人の乘合さへなく。寐るも起るも自由自在なりしかば。同くば成べく面白くなすこそよけれと。窓に依り居て冬枯の野の淋しき景色を眺めながら「雪氣催し夕去れば」と。母が好なりし琴の歌玉川一ツ歌たるが。後にて思へば。所もおらふにと。我心耻かし。

◉世には割合に持囃されども近頃の『女學雜誌』程趣味の饒多なるもの稀なるやうに思ふ。「隨感」欄は嚴本善治氏の筆に成るものとか聞けるが中々世味を咀嚼し得たる後の說と覺えて往々人の胸を洞するが如き銳利なる所と極めて溫かき所とあるに感ず。總體世の常の教育雜誌婦人雜誌などに見る稗氣乳臭を脫して兎も角人情を知ること淺からぬ記者多きやうに思はる。故に議論間々一見奇矯なるが如きものも再考の後微笑の中に頷かるゝが妙也。偏狹固陋なる基督教主義の人々なぞの眞似も出來ぬ卓立して大觀すと云ふ趣ありて奥ゆかし。（「新小說」第十三卷）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

大磯だより

中島湘煙

十一月廿四日

けふなるこの十一月二十四日を得て、昨年今月今日を懐ひ出ては、誰にこの本意なさと悲しさとを語るべきや。天氣の模様も庭の景色も、去年とすこしも變らぬが、一段のかなしみなり。十二疊ざしき、椽前の殊に戀しさに堪へぬこそ、心づらし。この家成りて、今なき君は。同月の廿五日、先わたりぬ。病重き身には、すこし人の住慣れし後ならではとの用意なり。横濱よりの滊車僅かに一時間餘なれど、動搖のため、不意の事生ぜんも知ずと、醫のいふにより、家人の心遣ひ一方ならず。中にも平素言葉すくなの君がをもひ、他人の想像すべくもあらざりし。醫は其日の天氣のみを撰ばんといひ、又齢高き人は、吉日を擇ばではといひしに、幸ひ、二十四日は天晴れて、日吉。かく兩ら揃ふは目出度事なりとて、濱を送る人も磯に待つ人、おの〳〵其時刻を定めたり。されど、宛も路の兩端にありて球を投ずるが如く、手にうけとる迄は、皆安き心のせぬとて、醫の送り來る事となれり。吾は家建つべき地と、家の圖とは知るも、いまだ見ぬ事なれば、心めづらしさにかられて、病も忘れたらん如く、新居も、故山に歸るの思ひあり。殊に埋骨の地とをもへば、かなしく且親しき心地せり。平塚を離れば、第一初に紀州殿の別墅あり。次に數丁を隔てゝ見ゆるが、即ち是なりと聞くを以て、平塚驛よりは、車窓によりて、眼もはなたず。忽ち其紀州邸なるものゝ顔に映ぜし時は胸踊りぬ。次なるものこそと凝視すれば、瓦に白きもの施せし家、著るしく現はる。家の窓悉く明け放ち、大陽を浴びたる椽前に、あらき縞のきぬ羽織し人も、滊車の來るを待ちまうけたらん如くに立ぬ。吾は覺へず白き手巾をふり動かしたり。椽前の人も手以て頻りに招きたり。滊車大磯に着きぬ。迎へ人多く來りぬ。吾が無事なりしを。皆うれしげなり。このうれしげなるに吾も亦うれしきなり。このうれしきを、早く椽前の人に語らばやとをもふの意切なれば、一々迎へ人に挨拶せんも、面倒なり。况や荷物の如きをやと、其まゝ人力車に飛びのりたり。なるべく緩りと、車夫に命ずる醫の注意も今はもどかしきをもひなり。今滊車

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

より望みし家の玄關に來りぬ。下女は臺所より飛出て笑ひ興ず。語らばやとおもひし人無言にて莞爾たり。吾も莞爾として無言なり。雙互の無言は幾百十萬の言語なり、幾萬千百の歡喜なり。待うけには、第一このものおろそかにてはと、茶器淸らかに備はるざしき見まはしつゝ、一椀の玉露に車中の疲れを慰す。文机を假の食卓と爲し、吾たしなむくさ〲連なりたり。いづくに坐してよからんかと問ふも又他人の家に來りしさまありてをかしく、露のものは、只これのみか、あまりご馳走のなきにあらずや。うなぎは田舍にも似ぬ冷しも憾みなれど、すこしく試み玉へなど、あるじめき玉ふも、情けによりて、またと世になきおもむきあり。この樣子にては今夕大したる發熱もあるまじければと醫は去りぬ。玆に至りて、座、別人のあるなし。吾が手を執て曰く、亦たのしからずやと。何を以て比せんやと。吾のこたへなどせしも、げに夢なり。夢なるも妨げなし。再び見得らるゝの夢ならず。前路去歲、吾を載せて來りし滊車、煙を吐き依然たり。又人をたゝしめし樣前も依然たり。獨り依然たらぬもの、いかに吾を泣しめんとするか。嗚呼今月今日。

講義

女義太夫の說

（エキスプレッションの巧なるは筋肉皮膚の軟滑なるに因る）

靑柳有美

女義太夫の流行まことに尋常ならず、其人氣山の如くなるに切齒慨慷する聖人、世には數多おはせど、我れは寧ろ之れを以て大に祝すべきものとなさん。盖し女人の與ふる肉感の慰めあるに惑はされて、女郞藝者のはしたなきに面白がり、惡所通ひに浮き身を窶つさんとする儕族の、稍々其趣味を高めて、藝術を職とする女義太夫に執心するに至りたればなり。故に我れは、この繁昌たゞならざるを觀て、日本青年の情感が、一大進步をなせるものなりとはいふ。夫れ、藝者は女郞に勝り、女義太夫は藝者よりも優れたるものなり。その陋卑の界を去るや、次第に遠く、プラトン主義聖愛に格るや次第に近し。是に至りて我れは、女義太夫なるものゝ一層の流行

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

と繁昌と人氣とを來たして、遂に茲に情感界の一轉化を起し、かの寸毫の詩趣をだも宿さゞる賣肉婦人の如き、萬人措て顧みざるに至らんことを希ふものなり。日本現時の如き、男女交感の組織備はらざるところに於て、惡所にも通ふ勿れ、歌ひ妓にも觸るゝ勿れ、又女義太夫にだも觀る勿といはば、是れ實に無慈悲にして人情なき酷言に非ずや。而して。女義太夫なるもの、繁昌する所因は、必ずしも特にその『女』なるが爲めのみに非ず、斯の藝術の眞輝光彩の、又女人を待て、陸離たるものあればなり。

凡て女人は、エキスプレッションの人種なり、發情に巧みなる動物なり。むくつけき男子もし之れを談ずれば、一小笑を價ひせざるほどの事も、一たび婦人の滑かなる口舌に上れば、天下人生の一大事の如くに響く。されば、女とは恰も精巧なる顯微鏡の如きものにて、さほどならぬものごとをも、大きやかに見せかけて、虛を以て實を現じ、無より有を引き出し得るほどの魔術師なりといはんか。すでに魔術師なれば、ちとばかりの悲しみに、雹の如き淚こぼして觀る人に哀れの心起こさせ、又胸にもあらぬ思はせぶり見せて男の心くさらせなどするも、實に無理なしや。されど、かゝる魔術師めける性情こそ、まこと義太夫には適したるものなれ。

夫れ義太夫に於て重しとするところは、そのエキスプレッションとぞいふ發情の如何にあり。發情とは讀んで字の如く、うちに鬱勃たる情熱と感激との、自然に發展して我が藝術の間に現はるゝことなり。されば、胸中既に蓄ふところあり養ふところなくんば、焉ぞ能く其エキスプレッションの絕妙なるを求むべけんや。是を、平凡なる義太夫の、聽くに堪ざる所因となす。されど、さほどの情熱とさほどの感激とを宿すことなくして、しかも其語るところの義太夫曲に、可なりのエキスプレッションあるを得せしむるは、女義太夫の功德なり。男子の語るところを聽くに、義太夫を聽くに非ずして、たゞ張り上げたる聲を聽き、玉なす汗と赤みたる顏とを觀るのみに止る如きと多く、餘程の名人に非るよりは、その發情の豐かなるに動かさるゝこと少なし。これ必ずしも、その修養の足らざるに非ず、その感激の至らざるに非ず、たゞ其得たる感激と情熱とを擴大するに拙なるが故のみ。是に於てか、男子は其胸底に餘程の修養を積むに非らずんば、語るところの

義太夫曲に生命あらしめんことは難し。然りと雖ども、女人はエキスプレッションの人種なれば、其得意の妖術により、胸中甚だ僅に蓄ふる所の情熱と感激とを擴大し、之を巧に發展して、その語るところに生命あらしめ、以て聽くものをして、感ずるところあらしむるに至るなり。故に、義太夫節を巧に語らんことは、男子に向ての一大難事なれども、女子に於ては頗る容易し。これ女人の男子よりも義太夫に適して、一に女義太夫の、今や天下に人氣隆々たる所因なり。豈に其の容色のみと言はんや。

然らば、何故に男子はしかく發情に拙にして、女子のみ獨り斯の術に巧みなるを得る乎。以爲らく、是れ偏に身躰の構造によれりと。男子は其生理的結構頗る巖丈にして、物に動さるゝこと誠に容易ならず。その骨は固く、其筋骨と皮膚とは、又堅硬にして滑かならず。故に、著しき動力を其胸中に收むるに非ずんば、之を動かして我が情熱と感激とを寫し出さんは眞に難し。されど、女子の筋肉と皮膚とは、頗る滑かにして軟かく、些少の振動にも動かされ易きものなるを以て、些かの感激と情熱とを其胸に收めば、直に之れによりて、その柔に軟して動かされ易き筋肉と皮膚とを利動し、巧にその語る所の義太夫曲に、エキスプレッションあるものたらしむるを得るなり。故に之を譬ふれば、男義太夫は彫刻に於ける木刻の如く、女義太夫は石膏彫刻の如し。その木材は其質の固定せるものなり。故を以て、刻像師の刀に任せて、その意の如きエキスプレッションの現れ來らんとは、頗る難しとするところなるも、石膏は然らず。その始め甚だ粘軟にして、容易に刻像師の手に『のり』來り、思ふまに〳〵我が精力を注ぎ得るを以て、之をエキスプレッションあるものたらしめんは、差したる難事にあらじ。されば、男は餘程の『腹』あるに非ずんば、人を感ぜしむるまでの巧致に達する能はざらんめれど、女人は左程の『腹』あるなしとするも、『ドウスル〳〵』の大喝采を博するを得べけむ。

若し、女人なるもの、此くの如くエキスプレッションに巧みにして、しかく義太夫を語るに適切ならんには、之を以て演劇の役者たらしめば、男子を用ゆるに勝る功德あらなんなど思ふ輩もあるべし。されど、こは誤りなり。かの石膏彫刻とは、エキスプレッションの、巧みに出でゝ美はしきものなれど

も、之を以て九段坂の大村像の如き千古に傳ふべき紀念像を作りあげんことの如きは、素より難し。たゞ其原型たらしめんのみ。これを作るはかの固たくるしき金屬の銅ならずや。義太夫の如き小さきものなればこそ、女人の細腕にもこなし得て、種々の利便もありたれ、劇の如き大なるものに至りては、之れを自由自在に演じ得んこと、到底女子に望むべからず。是に至りて　男子の嚴丈なるを要するなり、是れなほ紀念像に銅を用ふるが如し。もし之を女子に演ぜしめんか、必ずや手に持て餘して、ために生氣と活動とを缺くに至るべし。故に我れは、義太夫に女人を薦めて、演劇界より之を追ひ拂はんとを欲するものなり。　顯微鏡も黴菌を見るにはよけれ、大なる天體は望遠鏡によるものを。

我が女義太夫を賛する所因も、亦明ならずや。加ふるに女義太夫は其木戸錢僅に數錢のみ。若し之れあるの故に、青年をして悪所狂ひと不身持とを制めしむるを得ば、國家經濟のために頗る慶賀すべきことたるのみならず、不知不識の間に、藝術を敬重歎美するの心を生ぜしむるを得て、人情の陶冶を謀るに庶幾んか。もしそれ女義太夫の容色に麗美ありとせば、これ其肉質の麗美なるに非ず、藝術の肉質に宿りてなせる麗美なりと我れはいはんとす。

雜録

『冬』の觀

山形東根

噫冬の天地は來れり、吾れ春、夏、秋を愛するが如く又冬を愛す、冬と人と相關はるもの、抑も何かある、

◎冬の樂‥‥春は花咲き鳥歌ひ以て錦の天地を現はす、故に春の樂みは戸外にして晝間にあり、夏や炎熱蒸すが如し、故に其の樂みは晝間は戸内に夕刻よりは戸外に存す、秋や燈火親しむべく又郊外の散策も可なり、故に其樂み半ば戸内に半ば戸外にあり。冬や自然の美を缺く、加ふるに寒風凜烈肌を裂くが如し、故に其の樂みは夜間の室内にあり。冬の遊戯は凡て戸内的性質を有せざるはなきぞかし。

◎冬の美‥‥春は花、夏は氷、秋は月而して冬は雪なり、春

や天地の美を鍾め千紫万紅艶麗を極む、夏や萬緑蒼々として動植物の生々たる水の澎湃たる天地の壯大を示さゝるはなし、秋月の清高又人をして萬感に堪へざらしむ、冬の自然は他季に比して最も美の要素を欠乏す、自然美の稀有なるは冬の特質なり、而かも他季に於ては決して見難き『雪』を有す、其清淨、其純白、其廣漠、何者か之に及ぶべき。春の色は紅なり、夏の色は綠なり、秋の色は赤なり、冬の色は白なり、而して白や萬色素の根本を爲すもの。冬の美は白にあり漠にあり寂にありと云はん乎。

◎冬の仙…寒梅の積雪の間より咲き出でたる、福壽草又は水仙の床の間に咲きたるなど、めづらし、若し是等の花をして他季にあらしめば何の價値もなかるべきも、其萬花に魁けし、寒を冒すの一事、殊に面白しとめでらる。蓋し何れも仙骨を有するぞ愛すべし。

◎冬の食…冬は脂肪質に富める食こそ欲しけれ、夏の如き野菜は見れども見えず、至る所、脂肪多き鳥魚獸の肉類嗜まれ、食料も暖氣を增すものゝみ要さる、斯かればこそ勢力溢れ出てゝ自然法る抵抗し得るなれ。殊に愛する友だち寄り集ふて濃厚の飲食を試むるなど冬の恩惠ぞかし。

◎冬の病…冬は傳染病少なく衞生上に比較的安全なり、而かも肺病患者は冬を恐るゝこと甚だし、冬は彼等の敵なり、今年の初冬は二十歳より三十歳に至る有爲青年妻失を失ひしもの六七名の知れるあり。何れも肺病なるぞうたてし。ペストは時と所を嫌はぬものとて今倘蔓延の徵あり。さりながら冬は夏よりは概ね病氣に可なりと云ひ得べし。

◎冬の心　春は張る、夏は暑つ、秋は赤か又飽きなり、故に春夏は動植物繁茂の期、秋冬は睡蟄居の節なり、人や動物の夫れと均く、春夏は情的なり、秋冬に至れは智的に傾き冷靜の修養に適す理性の發達は冬に於てこそよけれ。

◎冬の女…冬は多血的なり故に女の容體は肥大となり、紅き顏は張れ切れんが如く、手足にはヒヾを生じ、肌色穢れて一般に醜を呈し、夏の美なるに反す、故に冬は見合ひなどには損するべし。本邦習俗として秋より冬に於て婚姻多きは、蓋し春夏の際己に見合ひしたる結果にて、甚だ好都合といふべし。又下婢は冬ほどつらきはなからん。主婦たる者心すべし。

◎冬の罪……冬は金を要すると甚だしき時なれば、財産に對する罪多し、小窃盜、放火之れ冬季犯罪の特色なり、但し各戶共夏の如く戶締りを放埓にせず、嚴重に防塞すれば、盜兒も深くは侵入せず、凡てコソ〳〵的なり、放火は北風の強きに乘じて火を放ち混雜に混れて取らんとの下心、可憐可恐。

◎冬の財……十二月は一年の總堪定時なり、故に集散の激烈なるは當然なり、一月は相互に馳走する時なり、故に散財甚だし。二月は前月の散財に顧み、節險する月なり、故に二月は最も不景氣なるを常とす。

◎冬の政……冬季は議會開會中なれば、中央に於て政論を集注す、春期以後、遊說其他にて地方に出張すれば、中央よりも却て賑かなり、冬は中央獨占の姿あり。

◎冬の遊……十二月は遊ぶもの少なし、一年の總勘定時、悠々として樂まんものはなかるべし、やけ遊びなどは除外例なり、一月は遊樂の中心時期、寄席、其他、諸興行物の盛大は此月にあり、二月は一年中最も遊樂少なき時なり。

◎冬の敎……十二月末日の除夜こそ宗敎的には面白けれ、其前後は殆んど動物的なり、十二月は神佛に冷淡の時なり、一

月は快活、生々、喜樂にして、凡て神道的にして、佛敎的に非ず、クリスマス祭は自詮名稱、祭禮的にして所謂宗敎的にあらず、冬の宗敎は基敎の一月初週の祈禱と除夜の一刹那こそ難有けれ。

◎冬の文……十二月は懺悔的なり、一月は希望的なり、懺悔なれば回顧あり失望あり、希望なれば計畫あり思案あり。厭世的の少なきは特色なるが如し。

◎冬の室……冬の室內は餘り廣からざるこそよけれ、夏の如く四方開けたらんには自然美に乏しき冬の汚さのみ見えんなり、されば室は狹くして南側に向き、書棚一、机など美はしく整へられ、傍の火鉢に沸湯の音などするこそ望ましけれ。

◎冬の喜……小供等の正月の來るを樂みにまちたるなど見るはうれし、一月に至れば鬼も笑ふの時節となる、何れの人も何れの家も祝ひ樂むなど見るはうれし、友の訪ひ來りて終日諧談する一月の天地ほど樂しきはなからん。

◎冬の悲……十二月に生存競爭の激しき時、不義理の借財も醫藥料も、義理首尾の徵しには多少の歲暮も、新年の雜費のまね、少供の晴衣、妻君の髪粧道具、さては重餠より松飾に

其他數じ來れば、冬の世の中の千態萬狀は容易に盡さんと欲

至るまて、散財の多きは何處も同じ頭痛の種ならざるはなし其他觀じ來れば、冬の世の中の千態萬狀、容易に盡さんと難し、一二を擧けて先つは擱筆す。

琴の音

天行

書讀むしつの圓窓を
さやかにてらす夕月の
ひかりこぼるる萩の花
下葉がくれのあき草の
茂にすだくこほろぎの
聲の哀のしみ〴〵と
詩人の胸もさけやせん
悲みおほきよひなるを
なほも夕風そよき來て
ちらと散りぬる花一りん
やかてきこゆる琴の音は
竹垣ひと重へだてつる
となりやしきの歌姬の
客のまねきの在らぬ夜を

かなづりあかす調にて
吉野の山のしらゆきを
踏みわけいりし戀人を
しづのおだまき綖れ糸
繰返してはおもひ出る
さすが靜のこころ根を
汲みて淚のひとしづく
調とだゆる夜もありき
世をにごりえの浮草は
昨日ながれの淵に咲き
今日うたかたの夢を見て
明日は淀みに散てゆく
時世さためぬ身乍も
しんの闇夜の雲きれて
星の光のにほふごと

逝きてかひらぬ色里の
流れの水に咲くとても
波に色香をうつさすに
夕の月をまちわぶる
床しき花のあらすやは
いまた素性を知もせす
琴の調は音のみにて
歌の心も知れされと
母としもめてうた姬と
たつる煙はほそくとも
心をこめし一ふしの
きよきしらべは夕月に
哀れも深くさえわたり
さらに一層澄みゆきて
はたと途絶る虫のこえ

罰を熱海の

さまよひ日記（其六）

悪寛の子　有美

つと歩み寄りて、かの出立の前夜ミナルヴァの君など、談り暮せる間に、南石先生が達筆を揮ひ給ひし肩書き附きの難有き名刺取り出して、『然るべき格好の宿屋もがな』と尋ぬれば、『さればなり。少し進み行き給はゞ、かしこなる馬車鐵道線路の衝きあたれる邊りに、「大勉强」と招牌かけたるがあり。讀んで字の如く、餘所かたより稍々安直なるべし』などいはるゝまゝに、その屋の店頭に至りて一夜の宿賴めば、合ひ宿にても苦しからずば、泊り給へよとのことなり。若しもこの怪しき法師姿に、つまらぬ疑ひ招きてうろんのものなりなど思はれなば、仲々に面白ろからず、又同宿者に心配をもかくることならめど、室に入るを遲しと待ちかねて、こゝ眞に、難有き名刺の揮り廻しどころぞ到來せる、其功德もこよなふ嚴たかならんめれと、『女學雜誌主筆（南石先生の說によれば、主筆とは會計掛に非ず筆取る役との義なりとか）青柳猛』と銘打つたる一枚出して、恭しく先客に挨拶しつ。こは千金丹賣りなりけり。

隣室といへど、障子襖こと〳〵く取り拂ひたれば、殆んと一室なるに同じ。後にて聞けば、玆に控へたるは、定期米に手出しゝ居る人なりと知れしが、仕事師めける荒男の姿とは見られぬ。夕餐も濟めば『君‥‥活動寫眞に行きませんかナ』と、我れと、我れと共なる千金丹賣りの先生とを促す。凡て土地の風俗など調べ知らんと思はゞ、多くの人あつむる寄席劇場などいふものに至り見よとは、かねて友の寒山君より聞くところなれば、この行また始めより此の志ありて、宿とりし所どころの興行ものには、是非に入り見んものと心ぎめせることゝて、促さるゝをしほに、いざと我れから尻輕く誘ひ出しつ。『我れは、小田原といふところ、今日が始てなれば、なるべく賑かなる町々通りて、此處の繁昌見せてよと、云へば『賑やかなる通筋は却て歸り途の頃なるが賑はし。では、その時に觀るこそよけれ』とて、定期米の先生、我一人呑込み顏に、活動寫眞のある劇場へとのみ急げり。木戸錢は八錢なり。仲に入ば又八錢なり。八錢又八錢合計十六錢は、我寂き財嚢に取て容易の散財に非ず。之を出がけに拂ひし宿料の廿三

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

錢に比すれば、何たる高價ぞ。夕の膳に上りしは、新鮮なる黑鯛の煮つけに、猪口と汁まで備り、飯も六七杯は食ひたれば、安くとも卅錢は下らざるべしと思ひしに、この安直には稍々案外の驚きしつ。誠に以て看板に僞りなく「大勉强」なりとぞ賞せんか。しかも、翌る朝さへ、烏賊の煮つけに同く猪口と汁とあり。この物の高き時世に、よくも此まで直安に出來たるものかな。歸がけには、是非つれて觀んといひし賑かなる街も通はせで、かの定期米の先生、言を有耶無耶のうちにやりながら、またも急ぎ宿へとは歸りつ。我と千金丹賣りの先生とのみは、少し遲れて、其所らあたり行燈の光さやけきところ、うろつき廻りて後戻りぬ。

次の五日の朝、今や遲と膳の來るを待ち居る折り、例の定期米の先生、何思ひけん、俄に話かけて曰く『貴卿は女學校の主筆だそうですナ』と。この先生、『女學雜誌』とは、『女學校』の事なりと早飮こみせしものゝ如し。かゝる問ひ出して我に聞も、若や千金丹賣の先生にのみ名刺與へて、この君には與へざりしを夫とはなしに諷して、我 辱き名刺(こは讀者も知る如く、南石先生の御名筆なり)頂んとの所存ならずやと思ば、昨夜と同もの一枚出して『ナニ‥‥女學校の主筆ではありませんが、女學雜誌といふものをやつて居ます記者なので‥‥』といふに、この度は又前よりも一層の飮込顏に、恰も萬事氷解して胸のおさまりつきたらんといふ如き得意の微笑浮べて『なる程‥‥それで昨夜登樓らふ〳〵と、あア一生懸命に誘たんだナ。わかッた‥‥なる程、わかッた。女學雜誌の主筆なんかして居たら、矢張り實際當ッて觀んと、判りますまい』と、頻に我ながら感に入たるものゝ如く、首傾けなどして話に乘だし來る。されば、かの昨夜、我の賑かなる街觀てよと乞しは、是れ花街に遊べよといへる意なりしと推して、あの如く曖昧の擧動せるものなりと今は知られつ。この間投詞の出でし頃は、我の盛に箸取り居れる最中なりしが、流石の惡魔の子も、これには顏赤めて手持無沙汰に、頭搔などするのみ。膳も皆下られて、茶となれば話は、我の『記者』といふをあて込てか、文字のことに向ひしこそ、仲々興多く覺ゆれ。

定期米の先生まづ問を起して曰く『そんなに學問がなくッても、漢語を色々使のは‥‥あれャ才があるんですナ。日本と支那とは、字が同じでも讀が違といひますが、ほんとうなんでし

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

よふ乎』と。これは面白ヿになり申せり。凡て學び置しものは、何事も無駄にはならぬものぞ。豫て少く覺かぢりし北京官話を種に、大法螺吹て一ト泡吹せやるは、げに此時なり、と怪き支那語の智識探りながら『なる程‥‥その通で、字は同じに書ても、讀は全く違ますよ。假令ば、こう今の樣にお日いさまが上ば、『太陽高了』と書て、『タイ・ヤン・コウ・リヨウ』といふし、『先生』なんかと書て『セン・セン』といふし、『お早う』なんてヿは『偏早』といふし、『品物』のヿなんかは『東西』と書て『トン・シー』といつて『此品物はいかん』といふ代に『這個東西不好』なんといふ譯なんです‥‥』と語出せば、一座皆我博學に恐れ入てか、しばしはグーの音もなかりしが、定期米先生また問を續て曰く『よく「戰後之經營」といふ字がありますが、あの「戰後之」たけを取てしまツて唯「經營」といツたら、どういふヿになるんでしようか』と。『さればなり「もくろみ」といふヿでしよふ』『そんなら「計畫」と同じヿなんでしよふか』『まづそんなものでしよふ』と、漸くホッと溜息すれば、質問の矢は又續て來りぬ。この先生仲々馬鹿には出來ぬぞかし。我は恰も試驗委員の面前に出たらんが如し。『よく『積極的消極的』といふヿがあるが、あれはなんの事でしよふ？』これには、ちと速急の返答に苦みしが須臾して『サア‥‥「積極的」とはまづ「ドシ〳〵と」といふヿで「消極的」とは先「引込み思案で」といふヿなるべし』と答れば、此度は『危機一髮』の解は如何と問ふ。之には愈々困り果て、いゝ、しばしためらひ居うちに、かの定期米先生自ら解を與て曰ふ『わたしの所に、何時かこの「危機一髮」の說明を敎てくれた人があツたが、「危機一髮」といふは、一本の髮の毛で、大な石を釣した容だといふヿだが、何でしよう？』と。こゝぞ善き切込所なれと、直に聲に應じて『それは、嘘でしよふ。もしも、大な石を一本の髮の毛で釣たら、釣までもなく直ぐ切てしまツて、何も「危機一髮」な所はない』と笑ば、續て『處世』『吾人』などいふヿの質問瀕々として出來る。是までは、たゞ感に入り、聽のみにて、一言の口出さへせざりし千金丹賣の先生も、遂に口を開て曰『「刹那」とは何のヿです？』と。これぞ實に最後の最大砲擊にて、法螺も最早持きれず見けれは『ナニ‥‥それは佛語で‥‥』とお茶を濁して別ぬ。熱海指て行んとするなり。懷中はと精算すれば、正に金七十錢餘厘。これ實に二日の料なり。又心細そからずや。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

西都もみぢ寺

藤本露草

○東福寺

年は建長七年の
　秋の中ばの頃ほひに
九條相國道家公
　禪宗の宗衣ぬぎ棄て、
流行の俗衣に摸様をおき
　いきな通天紅葉染め
東惠日山の角帶に
　古月輪の古紋ぬき
最とも程よくまきしめて
　元の住居の假庵の
海藏院や栗棘庵
　靈雲院や卽宗院
同聚院や永明院
　普門院や常樂庵
是等八つの法堂を
　後のもぬけと打棄てゝ
俗界近く逃げ遁れ
　塵の巷に交りけり
　　＊　＊　＊　＊
今は昔の東福寺
　草青々と吳竹の
伏見の里に築かれて
　古きすがたを殘しけ

○西明寺

槇尾の山にはえにし紅葉は
　智泉法師の宗衣なりけり。

○神護寺

年は神護景雲の
　二世に誇れる其時に
和氣淸麻呂只だ獨り
　眞宗の式に基きて
宗衣のかたを思ひ出で
　赤き三尾の紅葉染め
高雄山の頭巾
　梅ケ畑の袈裟衣
貫く淸く裝ほひて
　己が住居に假庵の
現王院や大師堂
　明王堂(毘摩堂)や講堂(五大堂)を
當の起居に假り定め
　總ての事を打棄てゝ
朝な夕なに經文を
　心に記して靜々と
俗界遠く避け遁れ
　線香の香りにむせびけり
　　＊　＊　＊　＊
今は昔の神護寺は
　紅葉匂へる洛西の
高雄の山に築かれて
　古き姿を殘しけり。

○高山寺

秋風に錦を染むる栂尾も
　昔しながらの色ぞ殘れる。

○林禪寺

年は貞觀六年の
　秋の中ばの頃ほひに
眞宗の律師永觀和尙
　淸和帝の御歸依に
厚く感じて永觀の
　楓の木にて造りたる
祖師堂や傳法堂
　古き宗式になぞらへて
庭は中島辨天池
　印度産種の菩提樹
其他如來の涅槃像
　凡そ古きを數十種
寺の寶と保存して
　都に近き東山
淸けき麓のすそのをに
　「聖衆來迎山」と名乘りして
佛陀と共に朝夕を
　靜に此處に避けにけり
　　＊　＊　＊　＊
今は昔の林禪寺
　もみぢ匂へる洛東の
山のふもとに築かれて
　古きすがたを殘しけり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

時事

教育宗教隔離の内訓

文部大臣は、去る八月二日に於て私立學校令（勅令第三百五十九號）を發布し。其翌日、内訓第十二號を布達したり。其の内訓の大意、左の如しと聞けり、

一般の教育をして宗教の外に特立せしむるは、學政上最も必要とす。依て、官公立學校、及び、學科課程に關し法令の規定ある學校に於ては、課程外たりとも、宗教上の教育を施こし、又は宗教上の儀式を行ふを禁ず。

是れ實に奇怪なる内訓にして、殆んど要領を得ず。地方長官も定めし其の施行に困却すべしと想像さるゝ程なれば、所云ゆる宗教縁故の諸學校に於ては、毫も此の内訓に顧慮するに及ばず。凡そ私立學校令に抵觸せざる限りは、遠慮なく從來の教育を斷行すべしと勸告し、女學雜誌第四九四號（八月廿五日發）に於て切に痛論する所ありき。

然るに、宗教界、寂として抗論を聞かず。反つて其の中小學校を閉鎖せんとするものもあるやに傳聞し、何事の盲從ぞ、腑甲斐なきにも程こそあれと思ひしに、此は偏えに吾人の誤まりにてありき。蓋し此の内訓の命令に關係あるべき宗教學校の當事者は、先づ愼敬の態度を以て、鄭重の手續を盡し、諄々として當路の大臣に問ふ所あり。仔細に情理を辨じて而して後ち已むを得ざるに抗議せんとせられし也。斯て、諸氏は、先づ陳情書を呈出し、數たび大臣に面會し、次官局長參事官等の辨明をも聞き、幾度びか交渉して遂に要領を得ず、今や則はち果然として公々然たる態度を取らざるを得ざるに至ると聞く。

抑そも、該内訓の無意義にして無益なる、不都合にして拙劣なる、天下具眼の士の夙に看破せし所ろなり。元と何の故に斯の如き内訓を發せしぞと推するに、外國人が國家教育の系統中に竄入して其感化を國民子弟の上に及ぼさんことを恐れたるを最大原因とし、排基督教の感情より發する自然の要求に出るを次の原因とし、頑冥不靈なる守舊保守の徒の反抗に怖れて渠一派の歡心に反かざらんことを期せしを其次の原因と

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

す。宜べなり、基督敎に對する狡獪なる迫害として、該信徒の憤激を來すことや。而して、佛敎徒の反つて手を額にして密かに之を傍觀することや。

然りと雖ども、之をして單に宗敎的迫害たるに止まらしめば、方今の勢趣に鑑みて吾人は暫らく默諾すべし。何となれば、今の基督敎の衰運は、寧ろ其の迫害なきより來る、玆に一大迫害あるは即はち基督敎をして一大勃興を奏せしむる所以と知れば也。

然るに此の内訓は、斯る氣勢を積極的に表明し得るものにあらず、左りとて基督敎主義學校の宗敎々育を實際に禁止し得るものにもあらず。只だ事を有耶無耶の間に了し、極めて固息曖昧に日月を消して、只だ漠然年を送らんとするにあり。何を以て若か言ふとならば、文部の當局者は、該訓令を解釋して、寧ろ左の如き意義なりと言明したり、

學校に於て、課程外たりとも、宗敎上の敎育を施こす能はずと言ふは、學校の名を以てする能はざるの主意のみ。もし學校の名を以てせざる時は、課程外、時間外に於て、宗敎上の敎育を施こし、其の儀式典禮を行ふと、總べて差支なしと。

嗚呼、これ該訓令を讀むもの丶平らかに解釋し得べき意義ならんや。文部當局者の眞意にして斯の如しとせば、天下眼を擧げて該訓令を一讀したるものは、皆な茫然として其の馬鹿らしきことに驚ろくべく、就中、守舊保守の面々は、愕然として其の意外なる變化に憤激すべし。

文部當局者の眞意にして斯の如しとせば、基督敎主義學校の諸氏は、事實に於て此の訓令の爲に束縛せらる丶所少なし。其の敎育を施こし、其儀式を行ふは、毫も前日と異るなく、其の實際に於て何の顧慮する所ろなきに係はらず、而も尚ほ抗然として大反對を表せざる可らずと爲す所以のものは、他なし、事、便益利害の問題にあらずして、義理名分に關するとの重大なるが故なり。

文部當局者は、何故に課程外、時間外の事に至る迄で、其の制裁を續けんとする乎。學科課程に關する法令の規定に準じ、官公立學校と同様なる敎育を施こさんずる私立學校は、其の規定の學科及時間内に於てこそ、畫一一定の制裁に從がわざる可からざるの理由あれ、其の以外に於ては純然たる私立學

校本來の自由を保有すべき筈にあらずや。文部當局者は何故に其以外に迄で干掛せんとする乎。彼の辯解とする所ろに曰く、これ完全なる時間割を一定したる其の餘分に於て、强ひて過度の學科を詰込ましむることなからしめんが爲めにと。然らば、何故に儀式を行ふことを禁ずるや。彼亦曰わん、時間の多少によりて許否を決せば煩に堪へず、故に規定あるもの丶外は一切許可せざるの外なしと。左らば一例を擧して曰わんか、規定ある學校に於て、勅語捧讀の時間は何處に定めありや。又、もし臨時に運動會を其の時間外に於て施行せんとする時、學校は其の名に於て實行すること能はざる乎。嗚呼、俗吏の辯ずる所は、古より同一筆法なり。强ひて力量以外、制裁以外の事に餘計の手を出して、後に自縄自縛す。渠等先づ試みに、今の官公立學校の實際を見よ。士氣絶滅、邪風横行威嚴毫しくも行はれず、德化地を拂つて無し。而して、渠等文部省の俗吏なるもの、案に倚り、筆を弄して、片々たる法案を制し、之によつて天下制すべし、人心縛すべしとなす。愚も亦た太甚しからずや。彼等、其の全力を傾盡して制裁すべき急要事件だに尙ほ一介の威嚴行はれざることを知らば、彼等の爲に毫末の厄介塡ならず、反て其不足を塡補せんとする獨立獨行の私立學校の爲に、其規定外、時間外の事に至る迄で、不相應の手を出すこと勿れ。

凡そ文部の當局者は、文政の影響絶大なる所以を知る乎。蓋し、文政とは、學校取締の謂のみにあらず。外にしては、外交と關すること尤とも密接に、內にしては、國民の風氣感情に影響すること太はだ深厚なり。もし此等內外の大勢に鑑みることなく、僅かに學校々舍の內に着眼して、教師生徒の名目ある社會をのみ學政の區域とせば、憫れむべし、文政とは、只だ學校取締の謂ひのみ。着眼既に陋なり、着手自から拙ならざるを得ず。今の文部當局者の只局促とし日夜小刀細工にのみ苦心するは、此が爲か。

夫れ、文部省、かの內訓を發してより、內國の宣敎師、海外の新聞雜誌、一齊に、多數に、現文部の排基督教精神を攻撃し、延ひて以て現內閣を疑がひ、更に以て現時の大勢を疑がはんとしつ丶ある實際を知る乎。

若し、文部をして實に排基督教精神ならしめば、尙ほ或は可ならん。即はち逆用して以て大利の牲と爲すことを得べければ

也。然るに、文部の主張せる所ろ、漠然として定まらず。眞意反つて左なきが如き痕跡だにありて、而して其の發令と、其の宣言とは、驕然として大勢を敵とするの觀あり。夫れ、其志なく、其力なくして、而して徒らに敵を招くを愚と云ふ。吾人が該訓令を以て、無意義にして無益、不都合にして拙劣なりと云ふ所以はこれ也。

寄書

見ぬわかれ

月野美代子

花子、御身は、此夜の月を如何見給ふか。さて心なき事なの給ひそ。むかし香久屋姫は、此月を見て常になきたりさか。香久屋姫にはあらねど、わらはは、見るたびにながむる度に、胸はりさけむばかりの悲しみあるぞかし。

花子、御身はわらはを呼んで姉さいふ。そは悲し言の葉ぞかし。いかで姉さはの給ふな。わらはが悲しみは、日頃姉さ呼はるゝ事よりはじまり、此よひの月の光を見るをその極さやいはまし。もはやその紅葉も散りすぎて、今はあさたになし。一週間ばかり以前には、緋の如く、錦の如く、此學び屋の人々、心ある心なき凡てめであへぬはなかりき、一夜、嵐は時雨さ遂に見るかげもなくなしはてぬ。そは、よべなりき。今朝は僅かにその一葉二葉殘れるありしも、そも今はあさなくなりしにあらずや。

あゝ、今よひの月の清き事よ。花に、いはでもあれ、此月さて、いつまでかかゝるべしや。あすよりは、あさてよりは、夜毎〳〵に缺け行くにあらずや。問ひたまふか。さらば果敢なき涙のあさゝ、くりかへさまし。あゝ月よ、願ふは、此夜、わらはが花子に語り了へなむまで、せめては曇らざれよ。

・　・　・　・

わらはは、此學の屋に來りし時は、今を去る事五年前なりき。年は十三、いま御身は十四さかいふ。さらばそれに一ッ少きものなりき。親に別れ、兄弟に離れ、故郷を後にして、知らぬ旅に一人來りたれば、もさより知る人さてはなく、只なつかしき校長の居ますぞせめてものたのみなりき。

室は今御身の居たまふ隣の室なりき。同室の人々は、まだ年若きわらはをいつくしまぬものはあらざりしさいへども、殊に妹さして、導きたまひつる露子さいふ人のおはしき。露子はふかき情のある人なりき。わらはが遠き處を一人はる〳〵來しをいかに、あはれさ思ひけむ、『來給ひては此學校殘らず姉妹に侍れど、殊にわらはは、御身の姉さおぼせ、わらはも姉さおもひ、及はずながら何事をもしるべし侍るべし。夕暮幽かに、鐘の音を聞いては、故郷の親をおもひいだし、人々の唱歌のたのしみをおもうては、その同胞をおもひいだして、いさ悲しきものぞ。されども、しばしなれなは、さもあらじ。たゞ學問にいそしみたまへ。ゆめ樣々の事をおもひ、科業をな忘りたまひそ』さ、さも懇に教へたまひき。然なりわらははもその時より眞に姉君たのみたりき。

わらははもさより一年級にして、露子は、來ん三月は卒業すべき人なりき。學ははるかに越へ、總はたしかに衆にぬきんでたり。いかで人々の尊敬をうけざらむ。師の君よりは、常に賞せられたまひ、その四年級修業のをりは、特待生さなりたる人なりき。

日數をふるまゝに、わらはは、多くの人々の名をおぼえ、月あまりにして全く親しき學生さなることを得たりき。そはわらはがためにいさうれしき事に侍りしさいへども、わらはが性、いさ輕薄なる事さて過ちたりし事多かりき。その度々露子は切に諫めたまふやうはさこしへに忘られず。

『湯に行きたまはぬか、運動したまはぬか、勉强は忠實にしたまへ』此は常の事なり

き、『月いと清し、紅葉もいと盛になりぬ。紅葉と月とを併せ見たらむには、如何に優しからむ』と、誘はるるままに、かたみに手をとりて、運動場をめぐり、返へまはり、非手の流に月を砕き、仰いて、紅葉のいまや照り行くさまを静かに眺めたりき。あはれ此日と此紅葉とは終世の紀念となりぬ、互に、語る事もせず、わらはは只、露子が悄然として佇立める様の、日頃にも似ず悲しき様なるに、その姿のみ見とりぬ。いまや月は漸やく、紅葉の蔭をいでて露子の面を青白く照しぬ。わらははその時たしかに見とめぬ、その眼にはいふべからざるあつき涙の光てるを。折りしも、そよ吹く風に一片二片散りければ露子は「たのむかげなく紅葉散りけり」と幽かに口ずさみて、『美代子、はや紅葉も散りぬるよ』と、何にかおどろきぬるが如く、ふとふりかへりて微笑み、ふけぬるまゝに、室にかへりき。

その翌日、わらはは二時間目の科業を了へて、來たれば、露子は机にもたれて、手紙様のものを抱いて甚たしき苦るしき歎息をもらせり。『姉君、如何にかしたまひけむ、いたづきにや』と問へば、日頃にも似ず、『問ひたまふな、今日は問ひたまはぬこそ、御身の情なれ。いたづきにはあらず、如何にもなし』といひつるまま打伏したり。わらはは全くなす事をしらざりき。

翌日は、おなじ室の人の病みたれば、醫師に行きぬ。歸り來れば、露子が、涙ながらに、『美代子』とわらはを呼びたる聲のいかに悲愴の調なりしは。『寸度歸らざるべからずなりぬ』『いつ』と問へば『けふ、午後三時の汽車より』といふ。『なぜ』といへば、『悲しき事のあれば』と。あゝ、悲しき事、そは如何なる事にかなりけむ。わらははその時、强ひて、その悲しき事をいふことを得ざりき。そはそをとたふる露子の胸には、幾千萬斛の苦痛のこもれるが如き有様なりければなり。

時は十二時にちかし。あます處は僅かに三時。そも二時三十分よりは、是非出發せざるべからざれば、用意もいそがしく、わらははそれに手助する事を怠らざりき。『いつ、かへり來給ふか』といへば『やがて』とのみにて更に更らに答へず。『わらはの居すとも決して、忘りたまふな』と、その聲、耳に響いて、今なほあり。されどわらはは、やがてといひたる事をたのみて、さほどにも別れをおもはざりき。人々は歩調に送りていでぬ。『露子さらば』、こは一時の離れる送別の聲なりき。

悲しからずや花子。わらはは、明日は來らむ、今日や來らむと、露子をしきりに待ちつるに、一封の手紙は來たれり。如何なる事にかと急ぎ封を切れば、その内には、言葉はなくて、たゞ歌の下句を秋のすかし入りたる巻紙に、うすずみもて、ほのかに書けり。

　　その夜の月を思ひでにせよ

わらはは、その意をしらず。恥づかしけれども如何はせむとて、師の君に問ひぬ。師の君はそを見給ふや、何をか驚きたまひたる面ちして、誰れかとさはれ、露子のしかじかなりといへば、あはれげに、いぶかしげに見されたまひしが、明らずとて返したまひき。

花子、御身は知りたまはさるべし、その日の夕暮電報の來し事をいかで聞きたまへや。露子の逝去の報なりしよ。あゝ、露子、露子はいかなる病にて逝きしか、そは思ふとも及はさる事なれども、しかれどもわらははのその報あしを知りたる時及びその後の心緒の亂は、如何なりけむ、おしはかりたまへ。

露子は、資性温淳にして、篤實、學術はた優等に行爲はた女鑑あり。さるに如何なる魔神か、急卒に奪ひ去りし。わらははその後、ひたすら露子の逝きし故因をとひぬ。今やおもひ出す毎に悲しさやらむかたなし。

花子、そのゆゑよしをとふ事なかれ。わらはは答ふる事能はず。あはれの夜の月と、その夜の紅葉と、いまや春秋四年をくりかへして、御身と共に、あだかも、その夜の露子はわらはにして、その夜のわらはは御身なる事の、如何はかり悲しき歴史をくりかへしつるかをおもへ。

いま室よりわらはが名を呼べるは誰ならむ。花子、とかく夜もいたくふけぬれば、あすの科業にや差支へなむ。いざ踊らばや。されども、あゝ悲しからずや。わらはも再び露子の歴史をくりかへし、そのあとを追ひて、いつくにか行かざる可からざるか。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

隨感

○清濁併せ存らふ

壁一つを隔てゝ貞女、淫婦、同じ割長家に住ひ、苦節を守つて公心冲々たる志士の隣りに、逸居して奢り樂しむ、俗物の時を得顔に暮せるなど、世は驚ろくべき不調子なるものなり。左れば、いかに末世末法の時にせよ、利達權勢の力万々斤ありとも決して屈せざる義人の必らず存するヿ同もに、何等の智識孔德に從屬し、浴びるほどの道義の說法を聞きたりとも、尙ほ醜態を免かれ得ざる痴物あり。人もし此の實相を看破せば、失望もすべからず、過信もすべからず、世の至つて廣くして、道の極めて宏ひなるヿを覺らんとす。天下皆な腐れたりとも、驚ろくべきかは、天下皆な學べりとも、安んずべきかは。朗々たる一念の失せず滅びざるもの吾に在らば、吾は嚴然として立たん。天下甚はだ大なり故に亦た小なるヿを知る。豈に收めて吾が懷に抱き、微笑珍重して、徐ろに愛撫する所ろなからんや。

○慨然として任ず

古人或ひは高きに登つて遠く望み、馬に跨がつて淸風に御し、流に棹さして往くものに忍び、以て慨然として志を立つ。夫れ、慨然として志を立つる時、天地契合の神機、吾心感激の絕頂なり。斯の如くして、天命を知り、天職を覺る。賦せられて吾が双肩に荷ふ所ろの公義あるヿを念じ、身を聖壇に供して、懼然として奮發す。人もし此の境界に入れば、汚塵脫落し、淸心自づから兆す。天使來り護り、聖靈降り臨み、以て瓦器を神用となす。生れて此の秘機に接すると、人生最大の快事にあらずや。

○獨舞臺

看客を忘れ、舞臺を忘れ、規律を忘れ、喝釆を忘れ、只耳に鼕々の音を聽いて、自由自在に舞ひ、翩翻、衣ひるがへり、馥郁香散じ、足柄子、手柄子に意のまゝならざるなし。稱して、獨り舞臺と云ふ。人は、其の爲す所の事に於て、獨舞臺

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

の感覺なくんばある可らず。

○尚ほ血涙ありや

痴情は迷ひなり、迷ひは一時の變のみ。其の常に復らんと遠きにあらねど、彼の冷血薄情の輩らや、以て同日の比となすべくもあらず。大丈夫の大志を寄せて一婦を思ふ、もしくは淑女の貞戀堅固にして一生を托するなど、鬼神尚ほ哭するのまことあり。人間苟しくも感ぜず、徒らに放涙して更に他の邪辟を犯すものの如き、寧ろ其の血涙あるや否やを疑がふ。

○泣き笑ひの苦節

人生の恨事、義理人情の衝突にあり、一代の苦心、泣笑ひの場合に存す。身、其地にあれば絶躰絶命の心地すれど、流の極まつて亦通ずるとあり、顧りみて感謝せざらんや。他日、稗史小説に於て讀み、もしくは演劇戯作に於て覽るとき、端なく此の消息に通ずる時、慟哭して而も其の美に打たる。因て惟ふ、吾等たとひ其悲しきに居るとも只獨り居るに非ず、別に人の見て泣き且つ歌ひ玉ふものの存するあるを。

時事

○娼妓營業廢止起訴及勝訴の事

名古屋市に於て近時大問題となりしは、新地廓松坂樓の小六本名佐野フデより、樓主森田平太郎を相手取り、娼妓廢業認諾の訴訟を起したることなり。抑そも、娼妓と樓主との關係は、出稼、貸座敷の名によりて十分に明了せり。樓主は娼妓の身躰を抵當にすること能はざるなり。人身抵當の惡義は、方今既に明白となれり。左れば、今の多數の娼妓が唯々として樓主の慘酷なる束縛に甘んずるすら不都合なるに、警察署に於て寧ろ其の束縛を贊助し、廓内を出るを逃亡と稱して追捕せんとするに至ては尤とも奇怪なり。此事たる、もし人ありて現に訴訟を提起するとあれば、愕ろくべき恐慌を來さんと思ひ居りしに、果然今ま此出來事あり。而して、正に勝訴となりし也。聞く所によれば、其後原被兩告示談して訴訟を願下げたりと云へども、法廷に於て之に勝理を與へたる記錄は、近年に於ける一大事實にして、人權を守護し、娼妓を解放し、廢娼事業の上に一大勢力を與へたる効力は、蓋し永久滅すべからざる也。

○ピアソン夫人長逝

横濱共立女學校の創立者たり、同偕成女學校の校長たりしピアソン女史溘焉として逝く、去月三十日送葬せらる。故舊知友門下五百人、式場を出でゝ山手町の居留地墓地に葬らる、柩に從ふもの綿々首尾其端を望む能はざりしと云へり。熊野氏、其略傳を叙せられたる一部に曰く、

ピヤソン夫人は千八百三十二年四月七日米國ニウヨルク洲バチスタにに生る。父をルイス、ヘンリアス、タマスと云ひ、もと佛人なりしが、米國に歸化して、學校教授の職に從ひ、生涯教育事業を力めたる人なり。母は米人なるが又博學。父母共に堅實なる基督教徒なりき。ピヤソン夫人は其の第二女なり。四歲にして學校に入り、十七歲にしてバチスタル大學を卒業せり。其の曾て人に語りし

育の中に、自己は幼時甚だ剛情にして、特に文法などは最も厭ひ居りし學課なりしが、父の誡により、此は我が勉めざるべからざるとなりと覺悟して、其れより學も進むに至りたりと云へることありき。大學を卒へし年ピヤソン氏に嫁し、十二年間平和なる家庭を造り、其間に二女一男を擧げしが、不幸にも二十八歳にして夫を喪ひ、年若き身を以て兒女の鞠育を勉め居りしに、又これらも幾何ならずして悉く失へり。其れより傳道と教育に身を委ね、千八百七十年米國婦人傳道會社派遣する所となりて、プライン、クロスビーの二女史と共に我國に渡來せり。當時横濱に在る宣教師とては極めて少く、バラ氏等數人に過ぎざりしことなれば、まして女子教育などは全く之なしと言て可なる程なりき。唯だミス、キダ（在盛岡ミロル夫人）、及びヘボン夫人が少數の女子に英語を教へ居りしのみ。ピヤソン夫人はやがて山手四十八番館に於て學校を開き、男女の生徒に英語及び聖書を教へ始めしが、後純粹に女學校となし、終に今の二百十二番館に家を購ふて、此を共立女學校と定めたり。夫人は教育のみならず、又傳道の志深く、學校の課業を終れば、市の所々に行きて道を說きぬ。其の方法の如き、常人の能はざることと多かりき。時としては戸毎に訪問し、未だ一面の識もなき人に道を傳へしことさへあ　。豫ねての志望は傳道をなす女子を養成するにありしも、普通教育の方に適當なる後任者を見出ださずして遷延し居りしが、八年程以前終に其の志を達するを得たり。夫人は唯だ横濱に限らず、其の教へつゝある弟子等を率ひては、遠く諸方に傳道し、其の功績見るべきもの少からず。學校にありては愛心を以て弟子を導き、門下又秀才に富む。

嗚呼、曩にツルー夫人を失ひ　次に加藤とし子、松本荻江子を失ひ、今また斯人を失ふ。女學界近事の落莫何ぞ甚だしきや。然れども、諸子は皆な其任務を了して永眠せられしのみ。徂く人は既に可なり。但だ能く其志を繼がんとするものの少きをこそ歎くべけれ。

○姫百合と日本婦人

近日、二種の新らしき女學雜誌を得たり、一は、國文家の手に成れる姫百合にて、美育に重きを措かるゝ如し。他は、下田歌子の編輯さるゝものにて、帝國婦人協會の機關なり。兩つながら、力あるものにて、前途の發達も推し量られ、坐ろに末賴母しき心地す。女文學界の再たびにぎやかになり來るは、よろこぶべきことにてあるなり。

○最近の演奏會

有美生

評者は、賴母木駒子君を攻撃するに於て頗る勤めたるものなれども、今やまさに兜を脫して、その不明を謝せざるべからざるの時となれり。君が婚儀を擧げられたる後ちに於ける進步の、實に快速にして稍々樂の神境を味ふに至られたる如きものあるを、誠に讚歎に堪えず。人婚儀ののちは多く進まず、而して君や然らず眞に結びの神の祝福によりて一大洗禮を受けたりといはんか。音樂學校演奏會にありても將又日本音樂會にありても、共演せられたるヴァイオリン獨奏アンダンテ、レッギオソーは蓋し能く原曲の妙味を傳へたるものにて、我れ傾聽して殆んど身のあるを忘れたり。滿堂また頗る感に入れるものゝ如し◉瀧廉太郎氏がベートーフエンのソナタ獨彈は兩會共に面白からず、讚辭を呈し難し。否な寧ろ其反省と鍛煉とを希はざるを得ず。もし忌憚なく言はしめば、君の演奏稍々眞摯を欠き、輕浮慢心に流るゝの恐れあり、却て昔に見劣りせらるゝぞ口惜しける。殊に君は、毎會常に好んでこの曲の如き巧緻多きものを撰まるゝの癖あり、これによりて其技倆の精妙なるを示さんとせらるゝに似たれど、これ頗る我れの君のために取らざる所なり。君は矢張り、雄大にしてユッたりせるものを撰まるゝこそよけれ。餘まり近頃の如く、目醒ましき演奏なくては　の評者も折角の力入れし甲斐なく、殘念なることゞもなり。◉合唱は分て目立ちしものもなく、たゞ高木らか子君の勢ひ猛けきのみ。管絃樂入りの『高津宮』こそ、ま　とのコケ威しにて、その濁りと加減、話にならず。管樂弦樂との合奏に關しては、曾ても少しく述べ置きしが、そのうち又同聲會雜誌の餘白にても借りて、科學的に評論すべし。たゞ納所辨二郎氏のベース獨唱は、益々進まれたるものゝ如く、仲々に美はし◉ユンケル氏とケーベル博士との合奏は、卒業演奏會のものに劣れるが如く、この二人に大幸田孃のヴヰオラを加へたるものも、其曲あまりに器械的にて面白からざりし◉唯この上の願は、もし大幸田女史にして若し我儕の樂慾を滿足せし

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

めんさの御心あらば、何卒凡てのゆき懸りを排して、ヒヤノ獨彈を試みられ給はれたきことなり⦿日本音樂會なる團体に關しては、後日詳細の評論を試むべく、聖堂前天幕内の同會演奏を聽きては、上野奏樂堂の構造、稍々反響强きに過ぐるものあるを感じぬ。

⦿東京婦人矯風會年會　去三日女子學院講堂に於て開かれ、潮田ちせ子會頭に再撰、書記鵜飼たえ子、會計伊藤せい子亦再撰。又、名古屋の娼妓廢業に件につき彼地より應援の請求あるたる爲め、潮田ちせ、本田てい、芳賀もと子の三氏、當路の有司を歷訪陳情すべきに决せられき。

⦿加藤とし子及松本荻江女史追悼會　同日同前の場所にて催され、島田三郎、下田歌子、戸川安宅の三氏演說せられき。

⦿幼者喫煙禁止案　衆議院議員根本正氏外四名より該議案を提出す、十八歲以下の幼者が煙草を喫するを禁ぜんとするなり。美擧なる哉。

⦿愛媛縣喜多郡婦人會　去十九日大洲公會堂にて同會を創開し、安藤よれ子會長に、森谷くに子副會長に、久保けい子及近藤さう子理事に當撰したり。

⦿愛媛縣　高等女學校新設の議案は、去八日の縣會にて可决し、松山、今治、宇和島の三ヶ所に設置することと定りたり。

⦿東京府の女學　東京府は來年度より、小石川の師範學校跡に、師範女子部と同じく第二高等女學校を新設し、又今の高等師範學校跡をも女子高等女學校となすよし。而して、費目の郡市負擔割合は、女子師範は男子部と同じく市部五分四厘、郡部四分六厘、第二高等女學校は市部九分三厘、郡部七厘の割のよし。

⦿紡績女工株主となる　大阪平野紡績會社の女工中、大北ジウ、植松ムメ、脇北イトの三人は貯蓄金にて同社の株劵を買入るるに至れりと。女工中の美事なり。

⦿山梨佛教會の女學　去八日甲府に於て發會式を擧たる山梨佛教會には、島尾得庵子、釋宗演氏出演せり。同會の事業經營の一に云く、本會は有志の贊助を得て女子學校を建設する事と。

⦿高野山と女子　高野山に女子を住はすとの流說に對して高野教報は曰く。山內寺院の外俗家に遵守せしむる山規ありて行はれ居れり然るに新聞雜誌の中に之を改正して女人の住居を許すが如く報ずる者あるは誤聞に屬せり累代居住する俗家は皆清淨堅固にして從令山規を廢するも高祖大師に對して决して古制を破らざるべきも來住して年處を經さる者の中には斯かる嚴格なる山規に服從するに耐へがたくて改正を希望する者あり然れ共决して夫人を住居せしめ肉食をせんと欲するに非ず只偶ま家族親戚等の者鄕里より參詣せし時宿泊することゝ圍碁將碁を許されたしと云ふ位の事なり然れども此山中は世間に異りて清淨を特色とすなれば俗家たりとも定まりたる山法は務めて守らざるべからず高祖大師の開き玉ひし昔を憶はゞ清淨の上にも清淨を加へて此山を永久に維持せざるべからざるなり。

⦿女子の美談　近來女子の美談多く知らるるこそ嬡こけしけれ。就中、富士新聞は連りに其の彰善に力めらる、惡を發きて得意とする人も多き世にありて、眞とに多とすべきとなり。近頃　其の揭載せし中に、左の人々の美談あり、

吉田長順の女、林清吉夫人ちよ女（神田皆川町備後屋）
藤田常治妻ちゝ（陸中國柴波郡赤澤村）
神方重吉妻のぶ（常陸國鹿島郡大同村大字和）
鋤崎さよ（熊本縣葦北郡水族村大字湞）
岡掛惣一郎妻たき（山口縣玖珂郡臼田村）
河西寅吉妻すて（山梨縣西八代郡岩間村）
明部勘次郎妻つき（下野芳野郡中川村河井）（下野日々新聞十二月九日）
吉川吉重の孫女（水戸市）（鳥取新聞十一月三十日）
故川崎加能子（川崎祐名氏母）（日本新聞十二月九日）

女人は惡人なるか　時事新聞（十二月三日）
トランスパール大統領夫人　時事新聞（十二月三日）
阿母の友（母の爲の新欄新設）　報知新聞（十二月八日）
米國の一夫多妻宗　時事新聞（十一月卅日）
吾妻櫻のお春　報知新聞（十二月八日）
女子教育と和歌の講義　富士新聞（十二月八日）
女職の維持（社說）　報知新聞（十　月三日）
古今髮のゆひぶり（一名髻模考）　東京朝日新聞
家内の經濟（萬朝報にて連載す。女髮結、特別上等の女髮結、大道の鮨店、駄汁粉屋、豆腐屋、西洋洗濯屋、蕎麥屋、落語家）
甘い物づくし素人料理　讀賣新聞十二月一日以後連載
婦人素顏　奥原晴湖。松本荻江。原れい子　報知新聞
令孃鑑　千代田日報
本多和子。松平繁子、同住男子
矢部の伊知女（豐州美談）　豐州新報（十二月四日）
七十の女丈夫（小石川得運寺）　讀賣新聞（十一月廿六日）

故鈴木弘恭先生遺　故人の二書

エフ、エチ、バーナッ

故人の三書

故鈴木弘恭先生述

第七版 百人一首講義 一冊二十五錢 郵稅四錢

此書初版以來、甚たく愛讀せらる。百人一首講義多かる中に、信切、緻密に解釋したるもの、先づ此書を推すと評せられたり。歌道に志ざさん人、並に正月の樂しみに心構えせん人たち試みに一讀あれ。又、年末年頭の贈品としては、表裝美くしく、極めて風雅の趣きあり。

故若松賤子譯述

第二版 小公子 一冊二十八錢 郵稅八錢

「小公子」既に世に定評あり。純潔可憐の讀物として、久しく推重せらる。此たび、英文原書出版せられ、手易く購讀さるゝに付、もし兩々相列べて讀み玉はゞ、英語獨學、譯述參考などに助けすること多かるべし。

故海舟先生高談、巖本善治筆記

第二版 海舟餘波 一冊三十錢 郵稅六錢

富田鐵之介、木村芥舟の二翁、勝海舟先生に關する著作中の第一として賛賞せられ、筆記眞に迫り、之を讀んで目あたり故伯に面するの心地すと言はれき。

以上三書 女學雜誌社、出版及賣捌

エフ、エチ、バーチット女史著

小公子

LITTLE LORD FAUNTLEROY
BY MRS. F. H. BURNETT.

上製美本石版密畫十數葉入全一冊定價金一圓廿五錢郵稅十錢並製クロース表紙美本定價金七十五錢郵稅八錢

「バーチット」女史の筆は、流快にして眞に迫るを以て、其名泰西に鳴る、本書も亦女史の筆に成り、字々句々一として快ならざるはなく、穎悟なる小公子が、天眞爛熳にして無邪氣なる所作を、寫し得て極めて妙なり、英文學研究に最も適切なるの書なれば、師範學校、中學校、女學校等の敎科書として最適當の良書なり、

發行所 東京神田區雉子町卅二番地 岡崎屋
東京神田區表神保町二番地 中西屋

當校は來る一月より開校す當分の內入校すへき生徒は十人を限りとす其詳細なることに至りては本校に問ひ合さるべし

明治卅二年十二月

東京府北豐島郡巢鴨村大字巢鴨二千六百十七番地 家庭學校

東京府北豐島郡巢鴨村大字巢鴨村二六一七家庭學校內 留岡幸助

山室軍平著

平民之福音

定價金二拾錢 郵稅金四錢

左に此書に關する批評の一斑を擧ぐれば

本書は信仰燃ゆるが如き著者が、救世軍士官として多年の間働ける經驗と、沈思の餘に成れるものにして、極めて熱心に極めて眞面目に、而して其平易簡明にして譬話に巧なるは、恰かも鳩翁道話の如くに基督の教を説けり、余は其書を讀で神の力の特別に著者の上にあるを感ぜずんばあらず（毎日新聞）山室君が平民の福音を傳ふるに特別の長技を有せらるゝは普く人の知る所なり、君一度口を開くや穏波浩蕩盡る所を知らざるが如く、平易の語調を以て善く天來の福音を説き、熱涙熱血交々溢れて側々人に迫り、聽者をして彼の眞氣に搏たるゝを感ぜしむ、此書説く所は君が口に唱ふる所を筆紙の上に移したるものにして、徹頭徹尾勞働者の傳道を目的とし、自ら序文に於て十七歳の時築地活版製造所の職工となりしを告げて勞働者なりと自白したり。思ふに君は辯説に於るが如く、筆に於ても確かに成効したる者なり（基督教新聞）熱情ある著者の言ふ所は確かに世教に禆益する所あるべし（大阪毎日）余輩はかく平たき物によりて御教の同胞に致さるるを喜ふ（護教）基督教の鳩鳩道話又道二道話とも言ふべきなるを覺ゆ。平民に取りての神學書なり、説教たりと言ふべし（福音新報）

諸君、讀め此基督教の鳩翁道話を讀め

發行所 東京市芝區南佐久間町一 救世軍本營
賣捌所 東京市銀座四丁目 敎文館
同 東京市京橋區釆女町 警醒社

單稅太郎がルスト遺著

單稅經濟學

田口卯吉君序 根本正君跋

青柳有美 小川桃花 川井運吉 校定

十二月卅日發賣 定價金卅錢

發行所 經濟雜誌社 取次所 女學雜誌社

明治三十二年五月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

明治三十二年五月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY